

古八幡付近遺跡

1992年12月

有限会社 島根急送
島根県江津市教育委員会

古八幡付近遺跡正誤表

誤	正
4項3行	
深間	梁間
7項3行	
m	cm
國版てづくね土器	
東南砂質黒色土	削除
國版終項	
東北	東南

古八幡付近遺跡

例　　言

1. 本書は、有限会社島根急送の委託を受け江津市教育委員会が実施した発掘調査報告書である。
2. 遺跡は、島根県江津市敬川町 405-2・406-1・407・407 第 1・408-1・415-3 外に所在し、字名は、それぞれツク田・ツクタ・八幡前・八幡前・八幡ノ前・キシノ下上エ、周辺には、宮ノ前・アンノサコ・叶松・山片ノ下等がある。調査地は、上記 6 筆の中である。
3. 現地調査は、平成 4 年 5 月 6 日から同年 7 月 9 日まで実施した。遺物整理は、現地調査と平行して行い同年 12 月 29 日に報告書作成作業を完了した。調査体制は、以下のとおりである。

調査指導 原 龍雄（江津市文化財研究会長） 三上 巍（江津市文化財審議会会長） 上田 勤（同委員） 宮本 巍（同） 山藤久男（同）
杉井和大（同） 山藤 孝（同） 島根県教育庁文化課文化財係
事務局 山藤通之（教育長） 植田教治（社会教育課課長） 三浦哲男（同課長補佐） 笹木睦子（社会教育係主事）
調査担当者 宮本徳昭（社会教育係主事） 渡辺郁子（遺物整理）
調査作業員 岩本一男 植田歳雄 大平正廣 柏村保雄 加戸利夫 小駅龍夫
島田ミヤコ 中村忠男 浜松鉄徳 横堀芳香 美又フサ子 山下幸子
吉村為春 和田幸進
調査協力者 諸日本海コンサルタント 原工務所 資料 島根県教育庁文化課埋蔵文化財調査センター調査第三係

4. 遺物について、島根大学法文学部田中義昭教授のご指導を賜った。
5. 本書の執筆・編集・写真撮影は、宮本が行った。
6. 方位は、調査時の磁北を示す。遺構の略称は、掘立柱式・建物-SB・溝-SD・土塙-SKとした。
7. 遺物・図面・写真是、江津市教育委員会で保管している。

目　　次

I 調査経過	1	2. 遺構	4
II 位置と歴史的環境	1	3. 遺物	17
III 調査結果		IV まとめ	20
1. 調査の概要	3	図版	

I 調査経過

有限会社島根急送（以下、事業者）は、江津市都野津町において営業していた。同地は、平成2年に「江津市都野津西部区画整理事業」により住宅用途地域として完了した。これにより敷地の減少もあり移転先を求めていたが、平成4年2月10日に開発協議に伴い江津市教育委員会（以下、委員会）に分布調査依頼書が提出された。委員会は、直ちに周知の遺跡の範囲である旨を事業者に伝え、同年同月17日に事業者の協力と立会いのもとに確認調査を実施した。結果は、多数の遺物と包含層を確認することとなった。これを受け事業者は、計画中止等検討したが、諸般の事情により遂行することとし委員会と協議をした。

委員会は、計画変更と調査費の見積り等を提示し合意をした。事業者は、同年同月27日付けで文化財保護法第57条の2第1項の届出をした。委員会は、江津市財政課と協議しながら同年4月4日付けで文化財保護法第98条の2第1項の通知をした。同年同月27日付けで事業者と江津市長の発掘調査委託契約を締結した。

現地調査は、同年5月6日から同年7月9日まで実施した。この間、江津市議会と江津市教育委員会の視察があった。同年7月3日調査指導会が開催され、「全面調査地以外を新たに計画を策定する場合、その都度協議すること」を条件とし、「やむを得ず」と結論が出された。同年同月4日現地見学会が開催され、約70名の参加者があった。

註 門脇俊彦 「古代社会の展開」『江津市誌上巻』1982年

『島根県遺跡地図』Ⅱ（石見編）1988年

II 位置と歴史的環境

江津市は、島根県の中央部やや西寄り「中国太郎」の異名をもつ江の川が、日本海に注ぐところに位置している。海岸線は、ほとんど砂浜となっている。山波は大きく2本あり、海岸線に平行している。水系は大きく3つに分かれ、山波の間を網目状に流れている。これにより小規模な耕作地が形成されている。

本遺跡は、敬川が市内西部海岸線に注ぐ約1.5km上流の右岸台地（標高12～13.5m）に立地している。現在のような堤防が造られる前は、下流（北西）へ約100m、西の台地端までが湿地帯並びに氾濫源と推定される所である。

- 古八幡付近遺跡
- 波子遺跡
- 大平浜遺跡
- 越崎遺跡
- 青山遺跡
- 半田浜遺跡
- 半田浜西遺跡
- 隠居田遺跡
- 天ヶ峰古墳
- 棚橋押込遺跡

- 六反田二又平古墳
- 行者山古墳
- 稲荷山遺跡
- 空山古墳群
- ツヅラヤブ古墳群
- 伝仏古墳群
- 二本松古墳群
- 神主城跡



第1図 周辺の遺跡 1 : 50,000

周辺には、縄文時代からの大平山遺跡群・半田浜遺跡等、弥生時代から古墳時代にかけての稲荷山遺跡・青山遺跡等、隠居田遺跡・天ヶ峰古墳・高野山古墳群と高野山北斜面の古墳群等もある。不明確ではあるが、市内数箇所に古墳時代から古代の窯跡がある。このうち棚橋押込窯跡は、須恵器・土師器を焼成しているようである。中世には、3箇所に城が築かれこれに関係する石造物も群集・散在している。二宮町神主（惠良）には、奈良時代に遡ると推される字名が残っている。

本遺跡は、古くから知られている。その端緒は、大正期の圃場整備と共に係る水路工事によるものと推定される。地形は、南西側と北西端の粘土採取・県道開設・北東の溜池の埋戻しや前述により大きく変形している。調査過程から旧地形は、大きく北西方面への舌状台地があり、その中で全面調査を実施した東端先へ周囲から傾斜していたようである。ただし、西側からの傾斜は微少なものである。

参考文献 門脇俊彦 「歴史編（古代）」『江津市誌上巻』1982年

III 調査結果

1. 調査の概要（第2・4図）

遺跡の把握は、3種類の調査方法で行った。

その1は、事前の確認調査である。重機により $1 \times 2\text{ m}$ の試掘穴を5箇所あけた。第1・5は、 $0.3 \sim 0.5\text{ m}$ の深さから弥生土器・土師器・須恵器の破片を多く含む包含層と遺構面と推定される面を確認した。第2～4は、 $0.5 \sim 0.6\text{ m}$ の深さから各少量と遺構面と推定される面を確認した。第6は、粘土採取跡で遺物・遺構等は検出されなかった。これをうけて双方協議した結果、各構造物の配置を変更し計画面高も上げた。

その2は、変更後の建築範囲と今後の調査等に備えた範囲の全面調査を実施した。客土層と旧水田層の中層までは、重機により除去した。

その3は、駐車場該当地での配水工事がされる時に立会調査を実施した。包含層までの深さを確認し、この面に達しないよう指導した。わずかながら事前の確認調査第2付近へ傾斜していった。

遺跡の範囲は全面であるが、

県道脇は削平されているようである。

検出した遺構は、掘立柱式建物3棟・溝状遺構7条・土塁3基・多数の柱穴である。出土遺物は、弥生土器・土師器・須恵器の破片多量、数点の石器、勾玉と管玉各1点・分銅型土製品1片・青磁1片等である。遺物の出土状況は、調査地全面にわたると共に量の差もほとんどなく、密度も非常に高いものであった。層毎の遺物の年代は、擾乱されており、場所的に年代の区別はほとんどなかった。

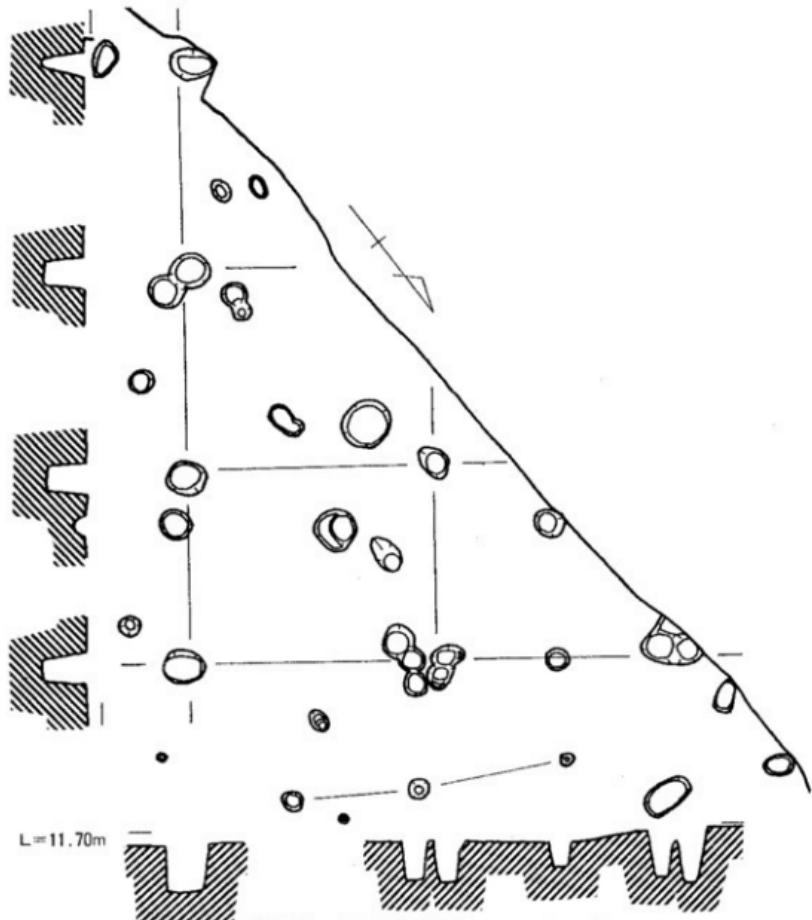


第2図 調査箇所配置図 1 : 1,000

2. 遺構

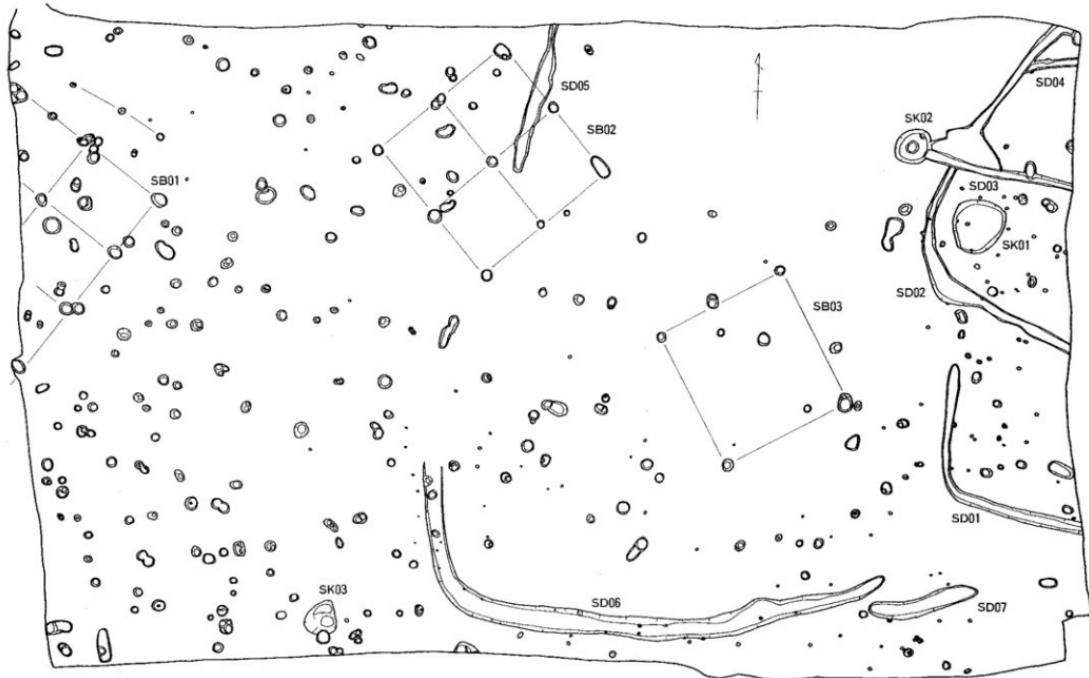
掘立柱式建物

S B 0 1 調査区西北に位置し、桁行3間（540 cm）以上・深間2間（440 cm）以上である。軸は、N-37°-Eとなっている。各柱間は、一定ではない。梁間現中央柱は、土色等から軸線よりも外側にある可能性がある。また、柱穴の重複しているものは、建替えない添柱が考えられる。なお、桁行方向南東側に柱間2間の柵状のものが推定される。



第3図 S B 0 1 実測図

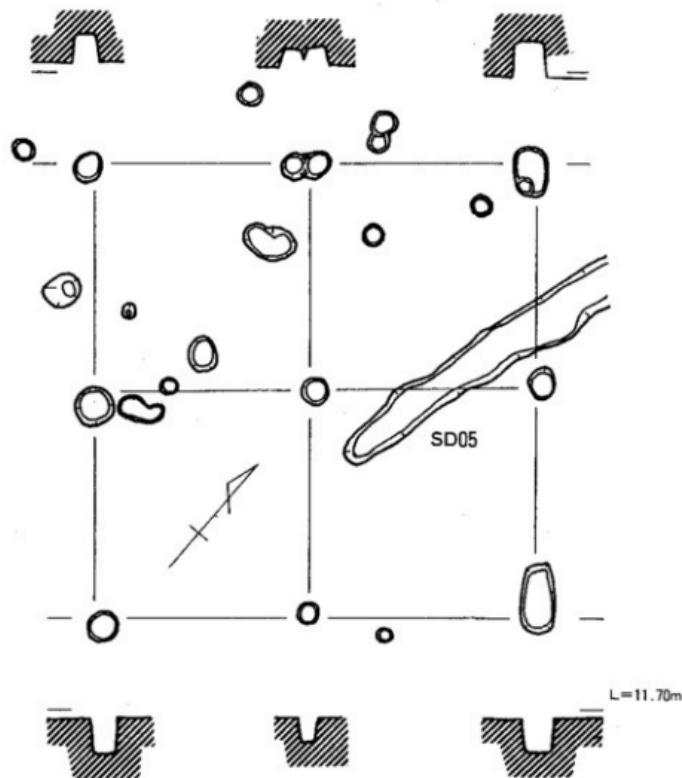
1 : 50



第4図 遺構実測図 1:100

遺物は、4柱穴から出土しているが、図示できるものはなかった。時期を明確にするものもないが、最も新しい時期のものは須恵器を伴わない土師器である。

S B 0 2 調査区北側中央に位置し、2間四方（400cm × 390cm）である。長軸は、N—41°—Wとなっている。柱間は、各軸等間となっている。柱穴内土色は多少色調が異なるが周囲の状況等からはば誤りなかろう。遺物は、1柱穴から出土しているが、図示できるものはなかった。時期を明確にするものもないが、最も新しい時期のものは須恵器を伴わない土師器である。



第5図 S B 0 2 実測図 1 : 50

S B 03 調査区東側に位置し、1間四方（360 cm × 340 cm）である。長軸は、N-29°-Wとなっている。柱間は、各軸等間となっている。柱穴内土色は多少色調が異なるが、周囲の状況等からほぼ誤りなかろう。短軸北西側はほぼ中央にある柱穴は、土色等からこれに伴う可能性がある。遺物は、3柱穴から出土している。図示できたのは、3点である。

1は、甕の日縁である。調整は、風化等により不明である。胎土に1.0～1.5 mmの砂粒を多量に含んでいる。弥生時代後期であろう。2は、高環の坏部である。調整は、風化等により不明である。胎土に1 mmの砂粒を多く含んでいる。

口径18.6 cm。弥生

時代後期であろう。

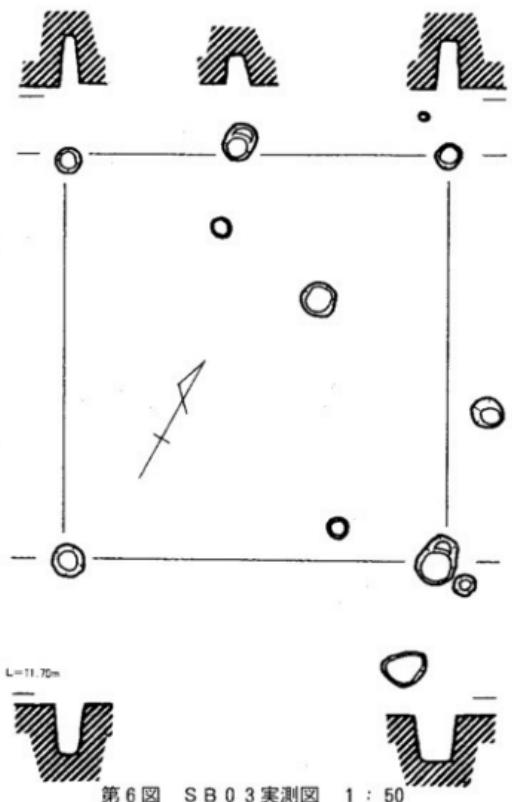
3は、高坏の坏上

半部である。調整

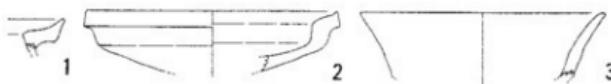
は、風化等により不明である。胎土に細砂粒を多く含んでいる。口径18.2 cm。弥生時代後期から古墳時代初めであろう。

土 坡

S K 01 調査区東端近く、溝状追構2本に囲まれた位置にある。周囲には、多数の杭状柱穴と柱穴がある。土坡内の杭状柱穴との共伴関係は不明であるが、深さ等から土坡内と周囲とは同様のものと考えられる。土坡の地山面からの深さは15cm、杭状柱穴は同じく13



第6図 SB 03 実測図 1:50

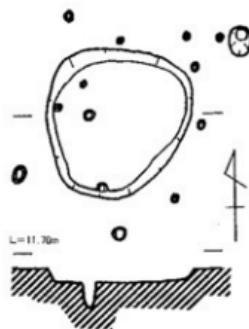


第7図 SB 03 柱穴内遺物実測図 1:3

~40cm、柱穴は同じく20~40cmである。土塙内から遺物は出土していないが、土塙内中央やや西の杭状柱穴内から2点出土している。ともに甕の口縁部である。胎土の色調は全く異なる。ともに風化等で調整は不明である。時期は、須恵器出現前であろう。

SK 02 調整区東端近く、溝状造構の端に位置する。中央の柱穴は、土層確認から土塙と同時期ないしそれ以前と考えられる。もう一穴は、栗材と推定できるものがあった。共伴関係は不明である。溝状造構とは同時期と考えられる。遺物は検出されなかった。

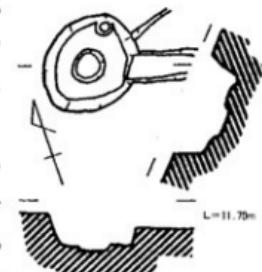
SK 03 調査区東端中央西側に位置し、柱穴群とともにあった。中から13個体前後の土器と2点の石器が一括埋られたように出土した。上層には、灰状の細粒土層も検出された。また、半円の浅い溝状のものが北側にあった。接している柱穴並びに周囲の柱穴等は、土層や切合い関係等からより新しいものである。図示できた土器は7点である。1は、第1層から出土した甕の口縁部である。風化等で調整は不明であるが、古墳時代初め（小谷）であろう。2も第1層から出土した。壺口縁部で、1mm大の砂粒を含んでおりハケによる調整がなされている。1と同時期であろう。3も同じく第1層から出土した甕または鉢の口縁部である。口縁に3条の沈線があり、胎土中に1~2mm大の砂粒を多量に含んでいる。図示できなかったが口縁部の観察から、同一層中で3種に大別できた。3と同種のもの2点、2条の沈線で頭部までが短いもの（1点は3に近い）2点、頸部がラッパ状のもの2点（2条の沈線1点・不明1点）である。大概弥生時代中期から後期にかけてのものであろう。4も同じく第1層から出土した底部である。平底と確認された唯一のものである。3とほぼ同時期であろう。5も同じく第1層から出土したものである。土器の形態等は不明であるが、胎土に1mm大の砂粒を多く含んでいる。3・4とほぼ同時期であろう。6は一括土器のうちの一点である。稜がはっきりしている。丸底である。



第8図 SK 01 実測図
1:50

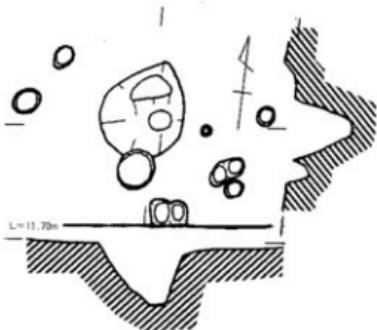


第9図 SK 01 出土土器
実測図 1:4

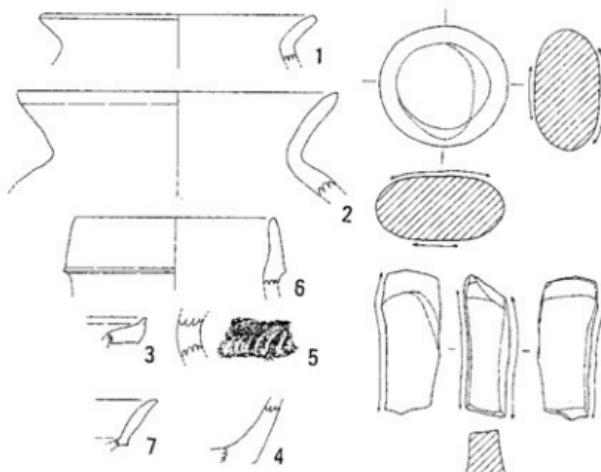


第10図 SK 02 実測図
1:50

1や2と同時期であろう。7は最下層から出土した口縁部である。甕と推定され、弥生時代末から古墳時代初めであろう。石器2点は、第1層から出土した。磨石は、花崗岩と推定される。敲打痕はみられないで、磨石専用と考えてよかろう。砥石は、砂岩状のもので3面をかなり使用しており、鋭利な刃物を砥いだものであろう。図示できなかった上器の観察状況は、大概次のようにある。北にあった半円の浅い溝状造構からは、稜の明確な鼓



第11図 SK 03 実測図

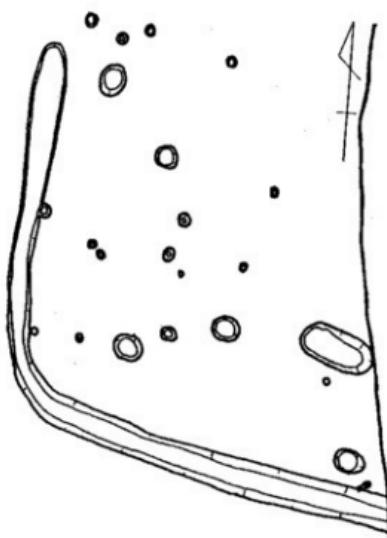


第12図 SK 03 出土遺物実測図 1:3

形土器片と推定されるもの1点・高環1点・壺ないし甕1点が出土している。周辺からは小形丸底壺と高環各1点・器台2点が出土している。いずれも本造構出土遺物の時期と一致する。

溝状遺構

S D 0 1 調査区東端に位置し、周囲には柱穴または杭状柱穴が多くあった。検出の深さは非常に浅く1~7cm、総長は約7.4mである。検出両端レベル差は、東端に傾斜しており約10cmある。遺物は、やや底から浮いていたが、曲り角と東端近くからまとまって出土した。図示できたのは、3点である。1は東端近くから出土した。高壺または低脚壺の壺部と考えるが、風化等により調整は不明、焼成はやや軟質である。須恵器出現前の時期であろう。

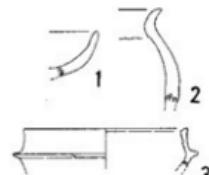


第13図 S D 0 1 実測図 1:50

2と3は、曲り角から出土した。2は小型丸底壺である。胎土に5mm大の砂粒を数点含み、焼成はやや軟質である。風化で調整は不明確であるが、手づくね土器状のつくりである。3は須恵器の口縁部の小片である。つくり・調整はていねいでしっかりしている。須恵器出現期のものであろう。

S D 0 2 調査区東端 S D 0 1 の北に位置し、周囲には土塙

や多くの柱穴や杭状柱穴があり S D 0 3・0 4 と切合い関係がある。検出の深さは非常に浅く1~7cm、総長は約11.5mである。S D 0 3周辺の切合い関係があり不明確であるが、S D 0 3付近を境に東端側へ傾斜しており約8cmのレベル差、同じく北東側へはほぼ水平であり約2cmのレベル差がある。S D 0 3との関係は、不明瞭であるが0 2が古いと考えられる。0 4との関係も不明瞭であるが、同時期ないし0 4が古いと考えられる。テラス状の凹地は、0 3と同時期ないし0 3が古いと考えられる。遺物は、明確に伴うものはなかった。



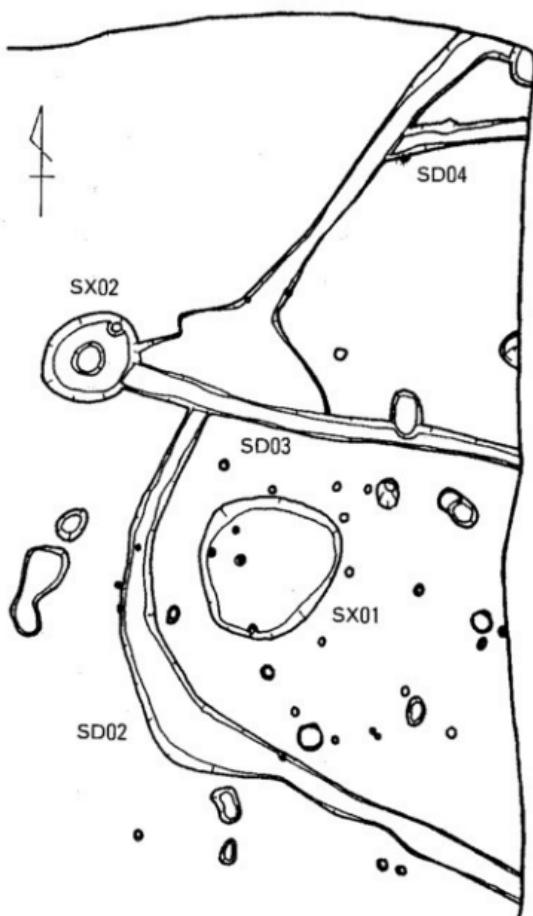
第14図 S D 0 1 出土土器 実測図 1:4

SD03 調査区東端S
D02を分断するように位置している。周辺には土塙や多くの柱穴が杭状柱穴があるが、共伴関係は明瞭ではない。検出の深さは平均10cm、総長は約3.6mである。レベル差は全くない。共伴する遺物はない。SD02よりも新しい時期と考えられ、テラス状の凹地とは同時期ないしやや古いと考えられる。SK02は、同時期と考えられる。切り合関係にある柱穴は、新しい時期である。

SD04 調査区北西隅に位置し、SD02と切り合関係にある。検出の深さは非常に浅く1~4cm、総長は約1.3mである。レベル差は4cmあり、SD02へ傾斜している。

共伴する遺物はない。SD02とは同時期ないしやや古いと考えられる。

SD05 調査区北端中央部に位置し、SB02と切り合関係にある。検出の深さは4~20cm、総長は約3.9mである。中央部が最も深く、細くなっている中央側から北へ約10cmのレベル差がある。遺物は、底よりやや浮いているが石と共にしている。図示できたのは、3点である。1と2は、高壙の筒部である。1は脚部の方向へ広がり、壙部との接合に内

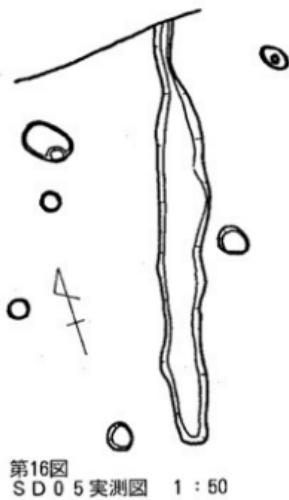


第15図 SD02~04周辺実測図 1:50

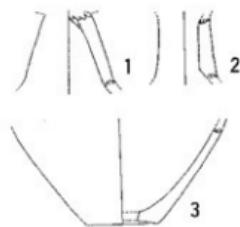
側から充填している。2はほとんど直立し、脚部へはかなり薄くなっている。色調は互いに異なり、胎土に1mm大の砂粒を含んでいるが、2には大粒も少量含んでいる。焼成は良好である。時期は明確ではないが、古墳時代初めであろう。3は胴部下半から底部である。底部はほぼ円形(1/2残)にうがたれている。外側は刷毛調整のようである。脚土に0.5~1.0mm大の砂粒を多量に含んでいる。焼成は良好、色調は1・2とも異なる。薄づくりである。弥生時代後期から古墳時代初めであろう。

SD 06 調査区南端に位置し、周辺には柱穴や杭状柱穴が多くある。西側にSK 03、東側にSD 07が位置している。検出の深さは非常に浅く1~5cm、総長は約14mである。レベル差は約9cmあり、東へ緩やかに傾斜している。共伴遺物は、若干底面から浮いているが東西方向の中央部に約3m離れてまとまっていた。図示できたものは5点である。1と2は、1つのまとまりで西側にあった。1は高環の壊部ないし砕と考えられ、風化等により調整は不明瞭であるが、内側は縦方向の凹凸がみられ、外側も斜め方向の凹凸がみられる。焼成は良好である。須恵器出現前頃と考えられる。なお、高環の筒部が1点ある。

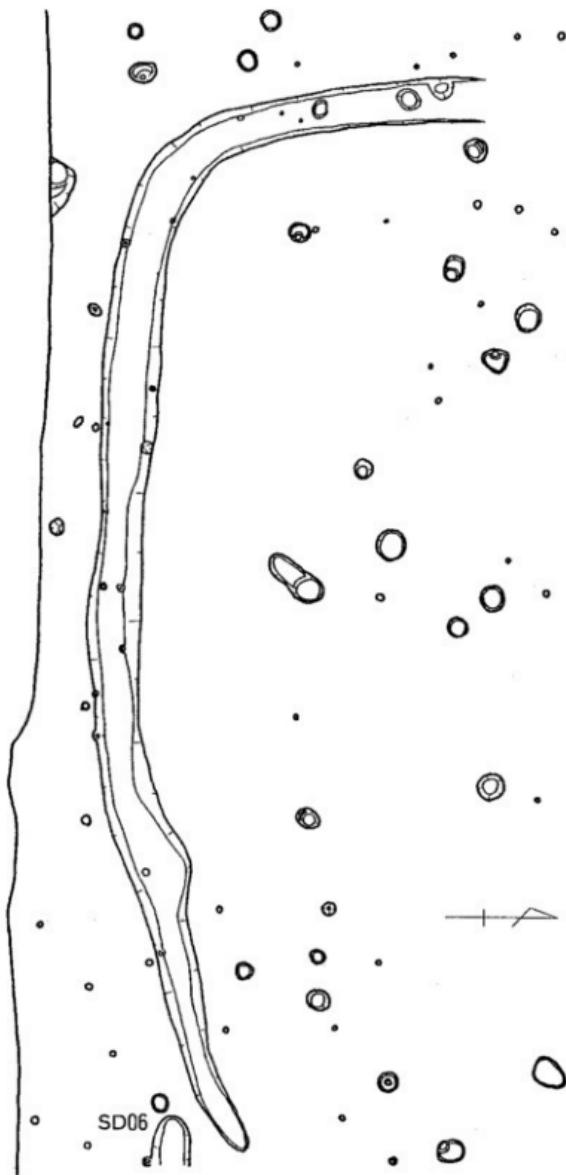
2は甕の口縁部である。内外ともに刷毛による調整がなされ、内側頸部以下はケズリとなっている。なお、この外に4との中間的な器形のもの1点がみられる。1とはほぼ同時期であろう。3~5は、東側のまとまりである。3は甕の口縁部である。口唇部は平らになっている。胎土に1mm大の砂粒を含んでいる。弥生時代末から須恵器出現前頃であろう。4も甕の口縁部であろう。端外側に段がつく。須恵器出現前頃であろう。もう1点、やや屈曲が緩く外側中央やや下に段がつき、胎土に3mm大の砂粒を数点含んでいる。ほぼ同時期と考えられる。5は鉢の上半部である。薄づくりで外側に浅い沈線があり、内側に外側の沈線にほぼ対応するところまで刷毛調整であるようである。他の土器とはほぼ同時期であろう。この外に、有段高環の段部がみられた。



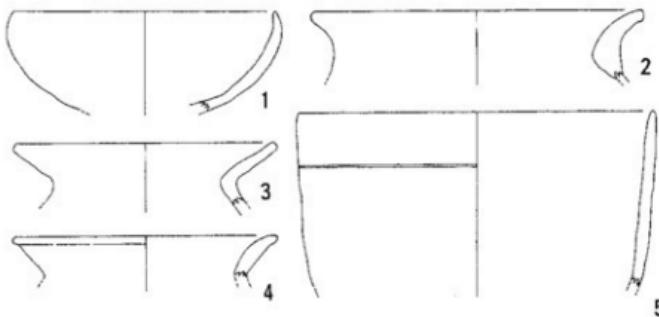
第16図
SD 05 実測図 1:50



第17図
SD 05 出土土器
実測図 1:4



第18図 SD06 実測図 1 : 60

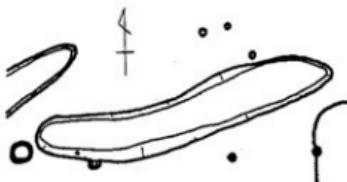


第19図 SD 06 出土土器実測図 1 : 3

SD 07 調査区南東隅に近く SD 06 の東に位置し、周辺に杭状柱穴があった。検出の深さは非常に浅く 1~5 cm、総長は約 1.8 m である。レベル差は約 3 m あり、やや東に傾斜している。共伴遺物は、若干底面から浮いているが西端近くにまとまっていた。1 は高坏の脚部である。筒部下端にはしづらぎがみられ、端部は平坦面を呈している。2 は甕の口縁部である。胎上に 1 mm 大の砂粒を少量含み、全体に丸味のある形となっている。1・2とも時期は不明確であるが、古墳時代前期と考えられる。

柱穴群 検出された穴は、西半分は密度が高くあつたが、SD 06 西端から東には杭を打込んだ痕としての穴がその多くを占めていた。柱穴と考えられる穴は、地山に含まれた石を含め石が入ったものが約 $\frac{1}{2}$ を占めていた。時期としては、弥生時代後半から古墳時代前期が中心であろう。杭状柱穴は、明瞭な企画性はみられないが、SD 06 等には両側に沿っている可能性もある。時期は不明である。色調からは、柱穴等とほとんど差がない。

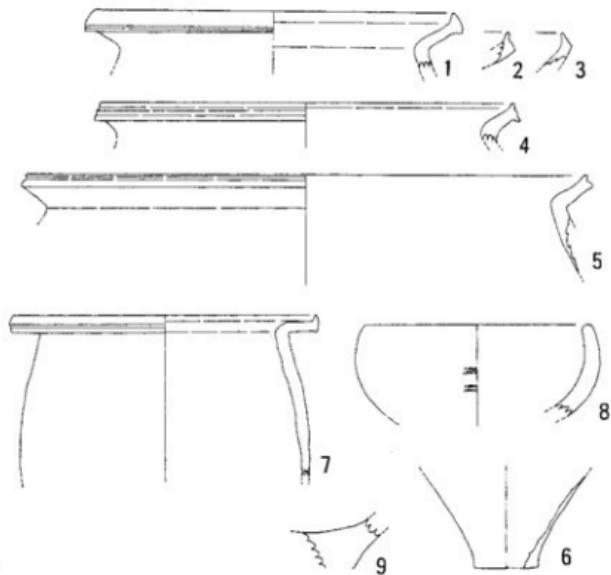
土器だまり 調査区北西隅に近く、SB 01 の長軸延長上に位置していた。埋土等は見られなかったが、底部は浅い丸底を呈していた。土器は、6 形態前後の甕と 1 種の台付碗状が微細片となっていた。図示できたのは 9 点である。1~8 は甕である。1 は 1 条の凹線文、焼成はやや軟質、胎土に 1 mm 大の砂粒を多量に含んでいる。2 は口縁部の一部である。



第20図 SD 07 実測図 1 : 50



第21図 SD 07 出土土器
実測図 1 : 3



第22図 土器たまり出土土器実測図 1 : 3

1条の凹線文と幅広い凹線文状のものがある。同様の施文で、内面の形態が直線的なものとS字状のものがみられた。いづれも不整形であるが、焼成は良好である。3は口唇に施文しないもので、口縁部がやや直立している。施文してないところがやや凹部となっているものもある。4は口唇部が上下に突出しているもので、2条の凹線状のものがみられる。胎土に1mm大の砂粒を少量含んでいる。頸部に7ないし8個の列点文がみられた。同様の形態で、上線に1、下線に2条の凹線があり間は広い凸状になっているもの1点がみられた。5は1条の凹線文があり、焼成は良くかなり堅くなっている。内外ともに凹凸がある。頸部以下は表面が剥離している。6の底部は、焼成、色調等から5と同一個体であろう。内面は、5同様に剥離している。7は焼成がやや軟質である。内外ともに凹凸があり、特に内面は著しい。8は台付碗状を呈している。体部中央下に、爪形文状が2段になっており、さらに下にもある。焼成は、やや軟質である。9はかなり厚い底部である。

3. 遺物

遺構に伴うないしそれに関連する遺物は、遺構の項でそれぞれ説明しているので、ここでは遺構に伴わないものと本格調査以外からのものについて述べていく。

グリッド調査関係

No.1 弥生土器・土師器・須恵器・土師

質土器の破片を採集した。1は甕の口縁部である。口唇部は、やや尖りぎみである。胎土に1mm大の砂粒を多く含んでいる。この外に甕の口縁部が1点ある。頸部から上が直線的でかなり外反し、内面は黒色である。ともに須恵器出現前の土師器であろう。2は壺の底部である。底外面から体部への変換部は、部分的に切離した時のものと考えられる外側への垂みがみられる。中世の土器であろう。図示できなかったが、四線文数が不明ながら弥生時代後期に属すると考えられる甕の口縁部1点、高壺の口唇部内側に突帯状のものがつく弥生時代中期に属すると考えられるもの1点、高壺の脚がやや偏平で端部内側に平坦面となっている弥生時代末から須恵器出現前のもの1点がある。いずれもほぼ同色・胎土である。須恵器の壺片が1点あるが、時期は不明である。

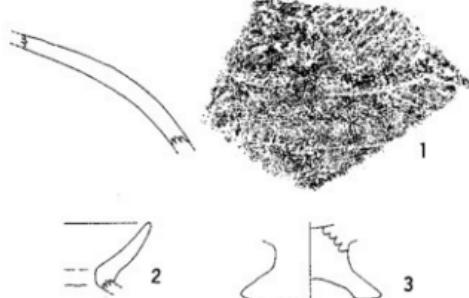
No.4 図示できるものはなかったが、中世土器の口縁部で色ちがい2点・同底部1点・須恵器壺片（時期不明）1点があった。

No.5 図示できるものはなかったが、低脚壺の脚部がかなり低いもの1点・土師器壺で頸部に櫛による斜めの施文があるもの1点（須恵器出現以前か）・須恵器1点（器形・時期不明）がある。

周辺出土 1は南接田の排水工事中に発見された壺棺の肩部である。頸部側の斜行沈線の長さと圓沈線の下のものの長さが著しく異なるのが特色である。小谷期併行であろう。2も同じ田から発見された土師器の壺は線部である。須恵器出現以前であろう。この外に、厚



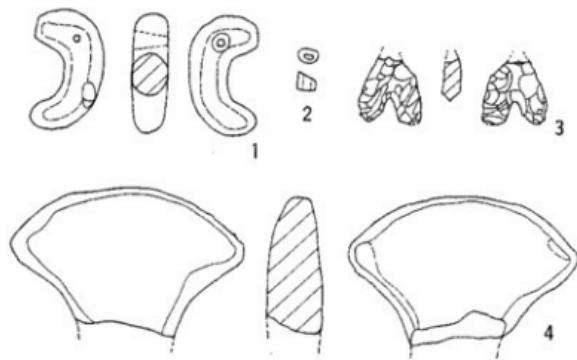
第23図 第1グリッド
出土土器実測図 1:3



第24図 周辺出土遺物実測図 1:3

づくりで3よりも脚部が低い低脚坏が1点・坏部を脚の筒部にはめ込む形式の高坏の坏部が1点（2と同時期か）・小型丸底壺1点と土師器甕の肩部1点（時期不明）が確認できる。いずれも1mm大ないし1～2mm大の砂粒を多く含んでいる。3は東側水田から発見された低脚坏の脚部のはば完形である。全体にてづくね土師器の仕上げである。内側端部は、平坦面をなしている。

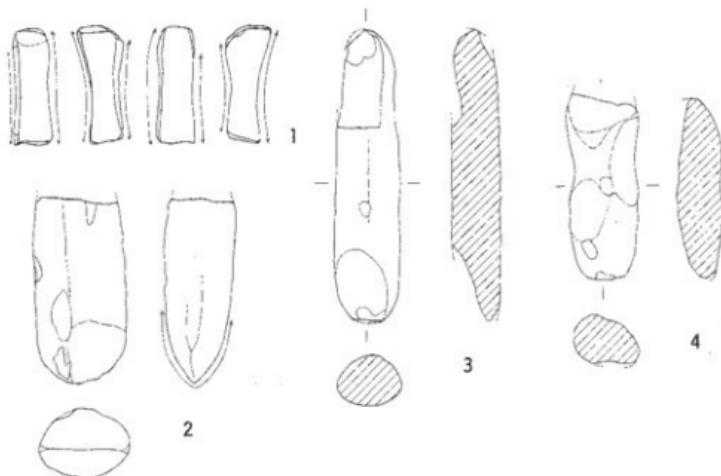
全面調査区 弥生土器片コンテナ3箱・上師器片同4箱・石器片同1箱・土師質土器片同1/2箱・須恵器片ビニール袋2袋外が出土した。全体の中で特記すべきものは、勾玉1点と管玉1点・黒耀石製鉄1点とチップ片・分銅型土製品1点・高坏の比率が非常に高いこと等があげられよう。1～4は、西北部（1/4等分-以下同）の旧水田床土層から出土したものである。1はにぶい暗緑色を呈し、縞状のムラがある。一箇列ワレが入り、一部欠失している。磨きは細い稜を残しており、所々に平坦面がある。穿孔は、一方からのみによる。2は1と同地点から出土した。明確ではないが、当初の形を呈していると考えられる。胎水色を呈し、黒色の混入物がみられる。穿孔は、2回並列状の作業をしているようである。出土状況から、1と2はセット関係として誤りなかろう。3はやや西南側で出土し、西南部ではチップ片も出土している。先端と片基部先端が部分的に欠失している。剥離面はやや荒く、材質も斜めに縞状の文様があり、2本ワレが見られる。隱岐島産の黒耀石であろう。4は淡黒色のいぶされたような表面を呈し、文様等は見られない。胎土に1mm大の砂粒を含んでいる。欠失の状況等から対象形のものであろう。



第25図 全面調査区内出土遺物実測図 1:2

5はSK03とSD05との間、西南の柱穴から出土した甕の口縁部である。口径約14cmを測り、2条の凹線が入っている。1mm大の砂粒を多量に含み、口縁部は黒くなっている。弥生時代後期であろう。6はSD05北東端の柱穴から出土した甕の口縁部である。口径約17cmを測り、不明瞭であるが外面に凹線がある。口唇部は、やや肥厚し端部が平面を呈している。1mm大の砂粒を多く含み、灰白色を呈している。古墳時代後期であろう。

図示以外の土器で特色のあるものについて述べる。西南の同一土層から出土の中に、高坏の口縁部から坏体部にかけてのものが2点ある。1点は、口縁部が直立し同外面に凹線4条、口唇部が平坦面となりやや整形時の内外への突出がみられる。内外全体に炭火物が多量に付着している。弥生時代中期であろう。もう1点は、同じく口縁部が直立し蓋受け状に張出すものである。口唇部外面に3条の凹線がみられ、丹塗りの痕跡もある。全体にていねいなつくりで、胎土も精製されたようなきれいなものである。さらに、前面が四角で水平に取付る把手と推定されるものがある。上面は、2条の竹管文とその外側に2条・側面に9条の凹線がある。内側と下面には無文である。この地方では類例をみない。弥生時代中期と推定される。東南隅断面から高坏・蓋のセットが、破片で出土している。胎土も同質である。時期等は不明である。東北隅から低脚坏の坏部口縁と推定されるものがあり、かなり口縁部にかけて内湾している。SK02の北（東北）から底径約11cm・底厚5



第26図 全面調査区出土石器実測図 1:3

mmの底部が出上している。器高は1.5 cmあり、外面は丹塗りの色と推定され、1 mm大の砂粒を多く含んでいる。手づくね土器が10数個体出土している。東南から3個体・西南から8個体・東側水田から1個体等である。東南のものが最も大きく（最大径約7.6 cm・高さ約5.5 cm）、器形もよくわかる。壺状のものでは口縁部は短く直立している。西南のものは、厚手のもの5個体と薄手のもの3個体にわけられ、ミニチュア各1個体・るつぼ形・チューリップ形・やや口縁部が開くものなどである。また、土師質土器片がかなり多量（コンテナ約1箱）出土している。全て北側の遺物包含層中の上部からである。

石器は4点図示した。1は東南から出土した砂石である。硬質の岩石製で、4面と角を1面使用し、かなり磨耗している。2は西北から出土した始刃の石斧である。やや軟質の岩石製である。先端部のみ摩耗痕がある。同形式のものがもう1点あるが、薄く摩耗痕も顕著である。3は西南から出土した用途は不明のものである。欠損部を除いて全面に摩耗痕がある。4も西南から出土した用途不明のものである。3箇所にえぐり状の凹部がある。石材は2と同様である。摩耗痕はわずかに認められる。

参考文献 「朝鶴川河川改修工事に伴うタテチョウ遺跡発掘調査報告書Ⅱ」

『出土遺物』 昭和62年3月発行 島根県土木部河川課・島根県教育委員会

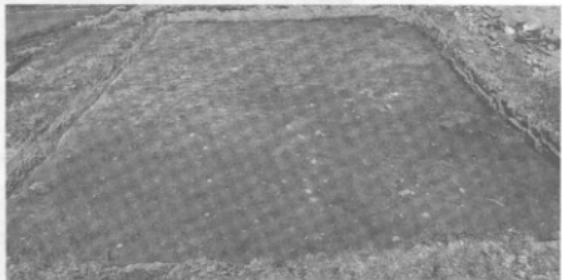
「同上Ⅲ」「第4～6層出土遺物の考古学的観察」 平成2年3月発行 同上

IV まとめ

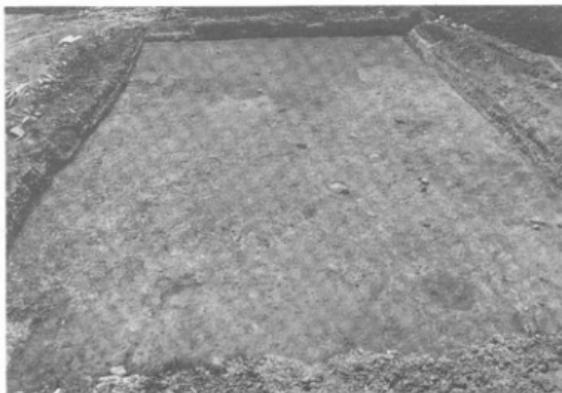
古八幡付近遺跡の発掘調査で得られた情報は、かなり豊富でかつ当方の歴史の解明に大きいなる貢献をするものである。しかし、期間と担当者の力量不足から充分な解析をできなかった。遺構面では、3棟の建物と溝状遺構等を確認したが、遺跡本来の範囲の一部の調査ということから完全な復元は不可能であった。遺物面では、弥生時代中頃から中世中頃までのものが出土した。特に、分銅型土製品・てづくね土器・勾玉・管玉は、特筆できるものである。図版を可能な限り掲載しているので、各氏のご検討に役立てばと考えている。本書での検討に誤りがあるので、訂正・ご教示を乞いたい。



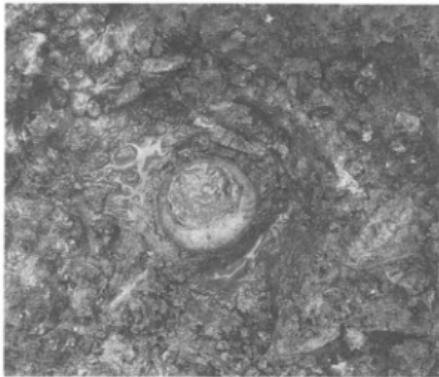
遺跡遠景 南から
(手前林上側)



旧水田床土除去後
西から



同 上
東から



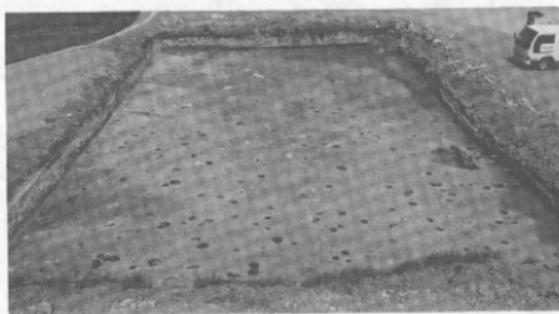
遺物出土状況
(旧水田床土)
北から



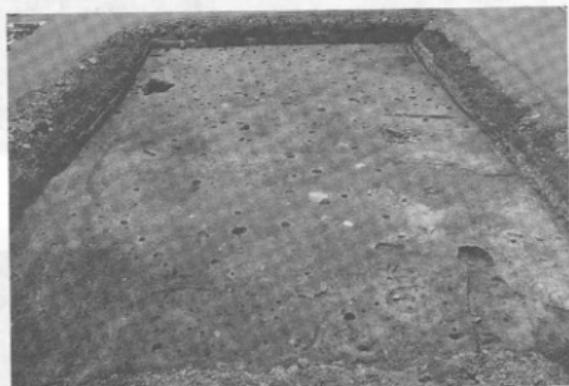
SK 03 遺物出土状況
南から



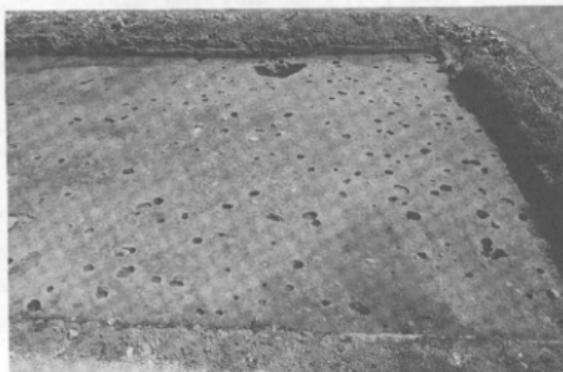
遺構検出後
(SK01・02
SD02・03・04)
南から



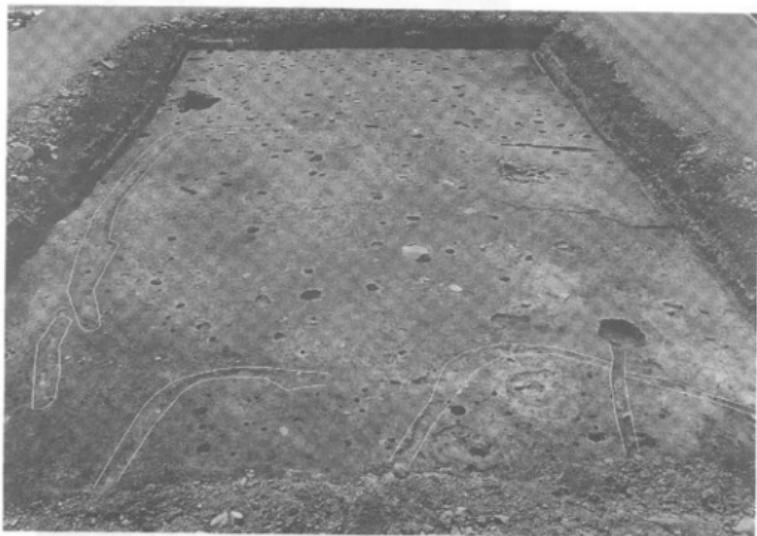
遺構検出後
西から



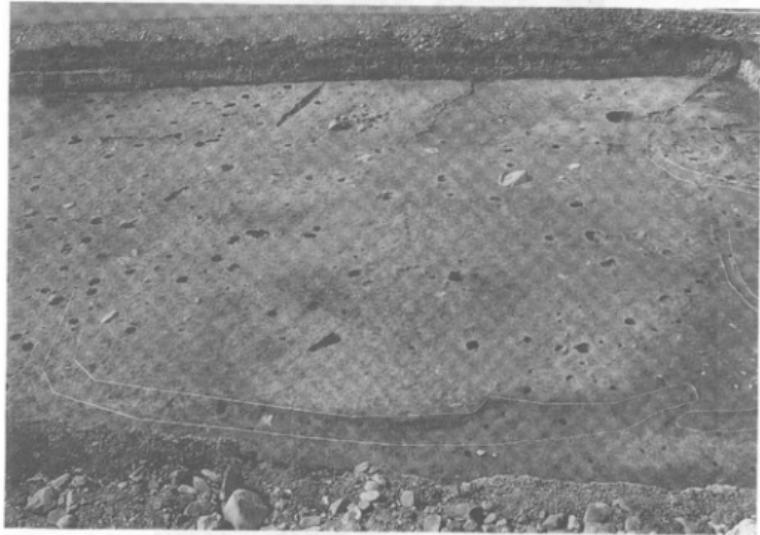
同上
東から



同上
(西側)
北から



遺構検出後 東から



同 上(東側) 南から



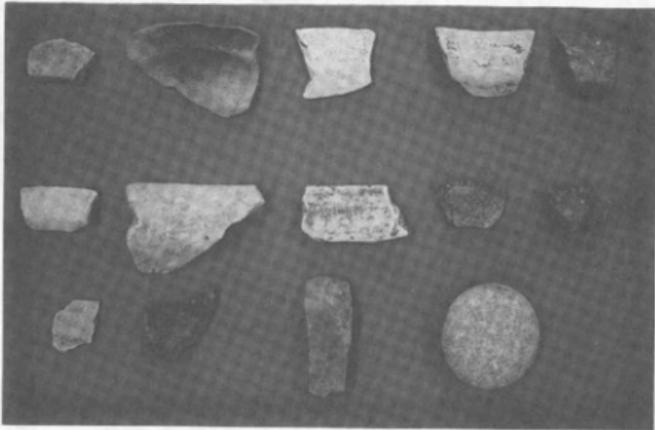
現地説明会



遺構検出風景



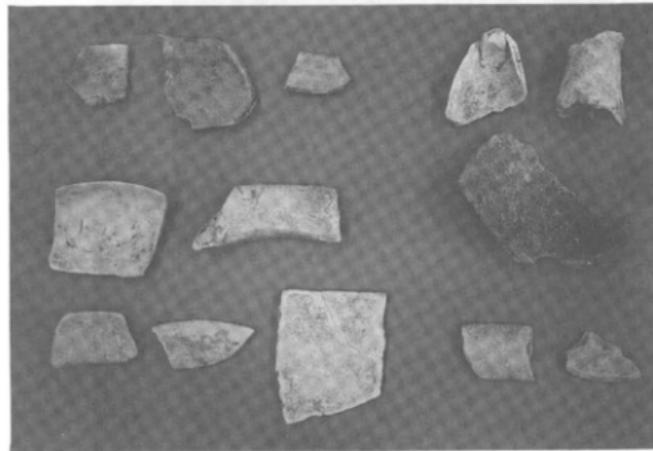
SB03 | SK01
SK03



同上



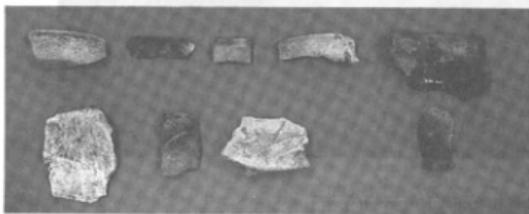
SD 01	SD 05
SD 06	SD 07



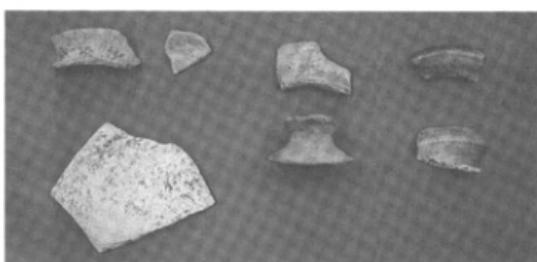
同上



土器だまり

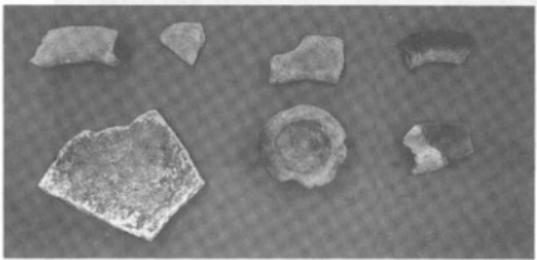


同 上

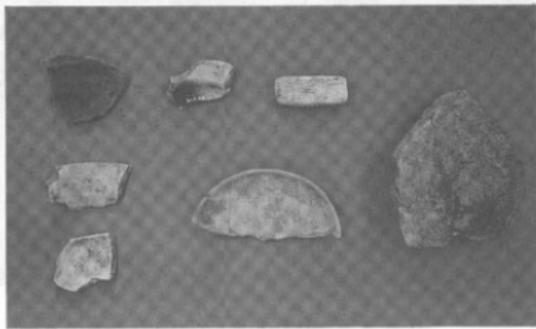
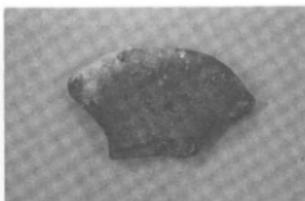


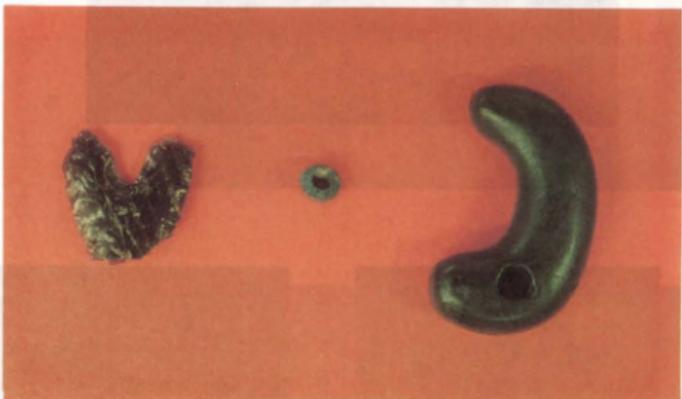
グリット関係出土遺物

No. 1	南接田	S D 0 5
南接田	東水田	周辺

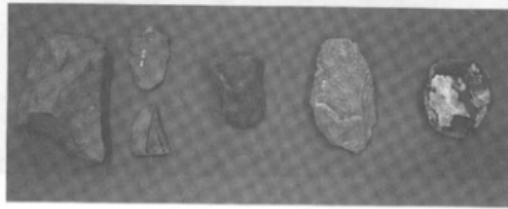
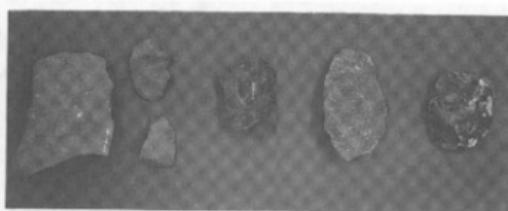
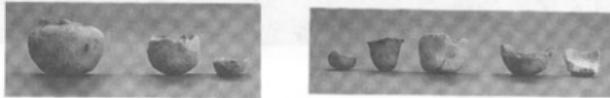
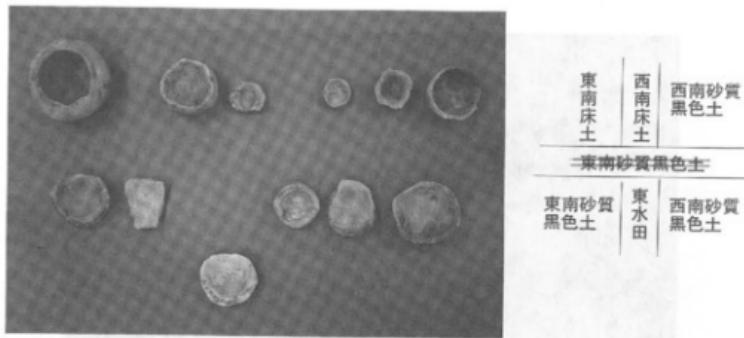


同 上

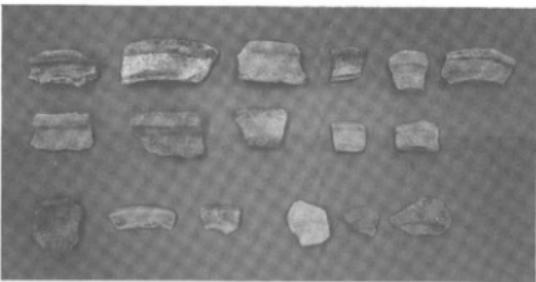
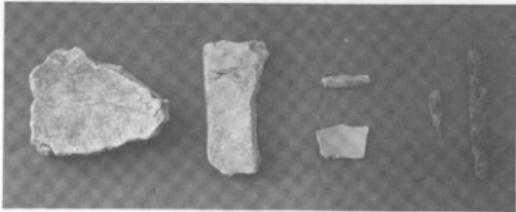




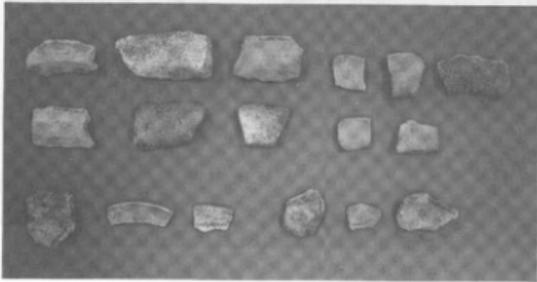




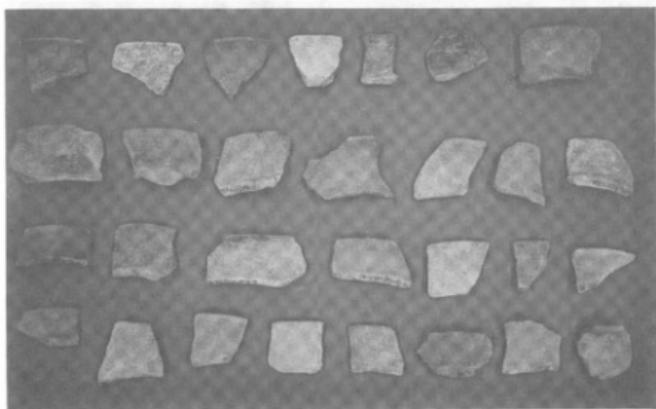




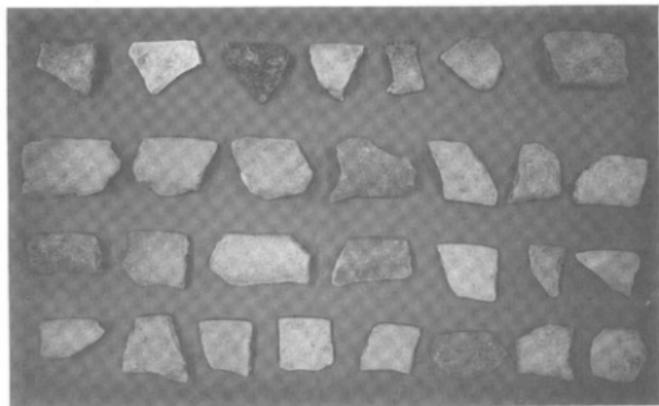
西北旧水田
出土遗物 1



同上



西北旧水田出土遺物 2



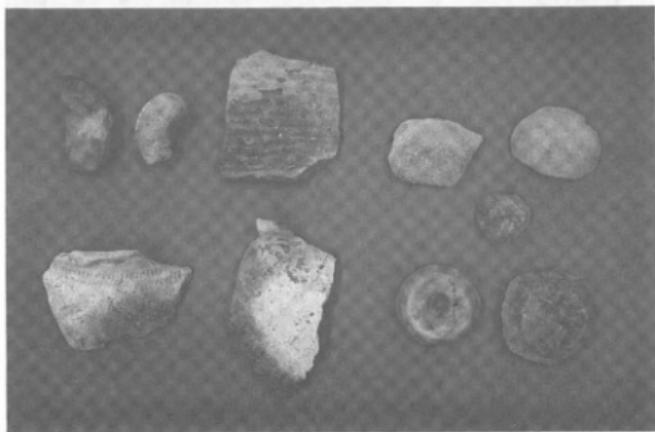
同 上



西北旧水田出土遗物 3



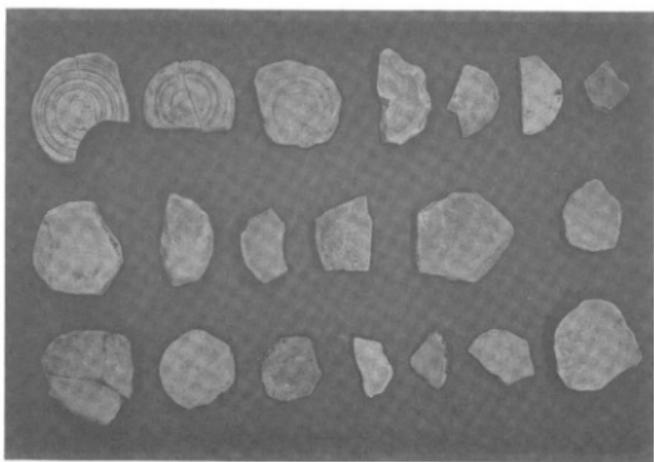
西北旧水田出土遗物 4



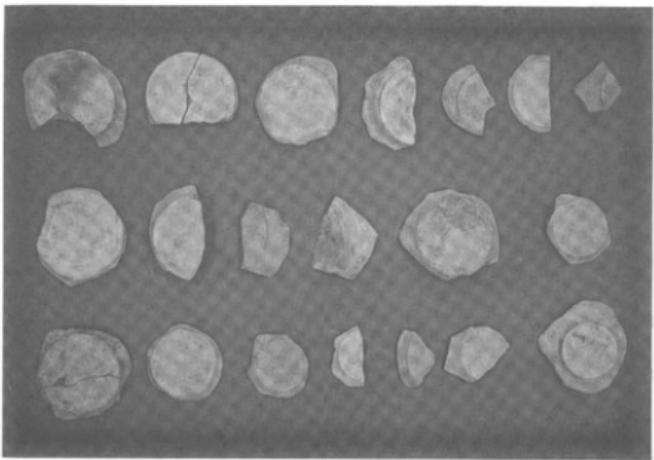
西北旧水田出土遗物 5



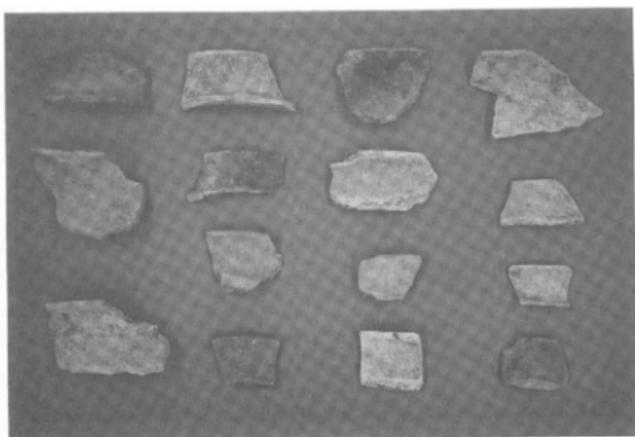
同 上



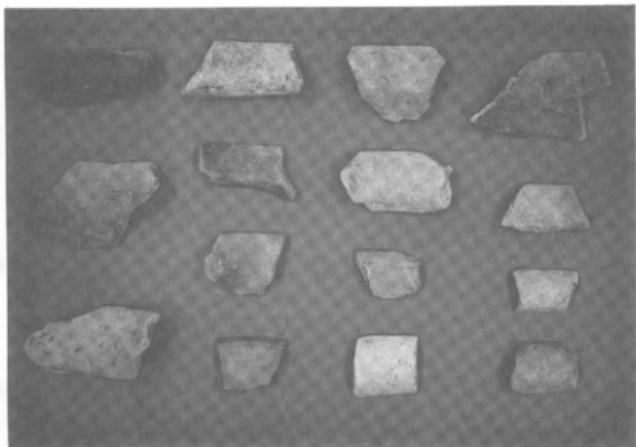
西北旧水田出土遗物 6



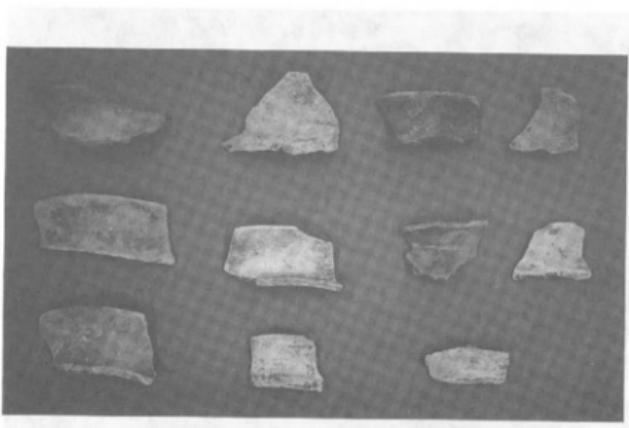
同 上



西南旧水田出土遺物 1



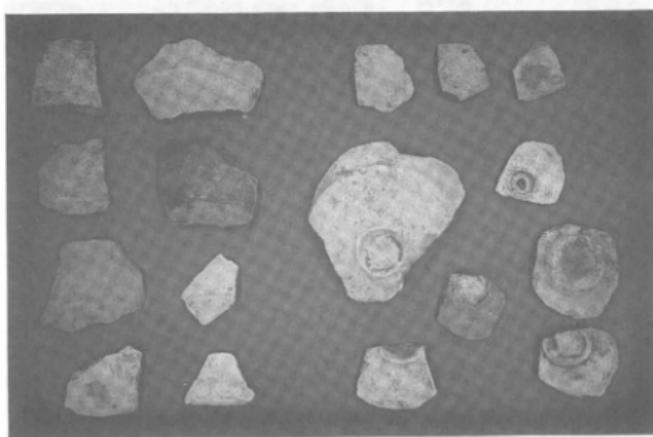
同 上



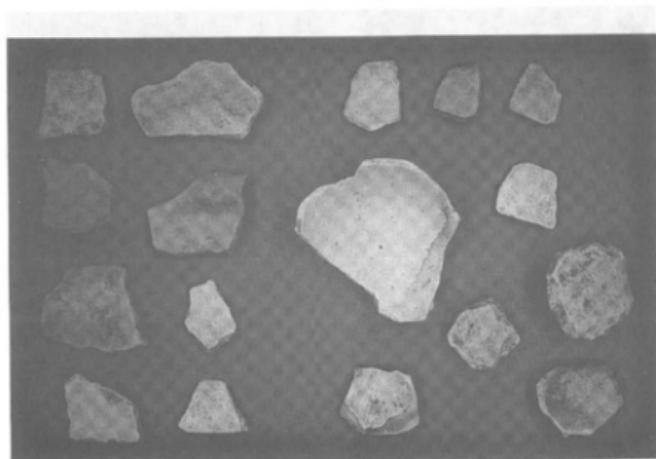
西南旧水田出土遺物 2



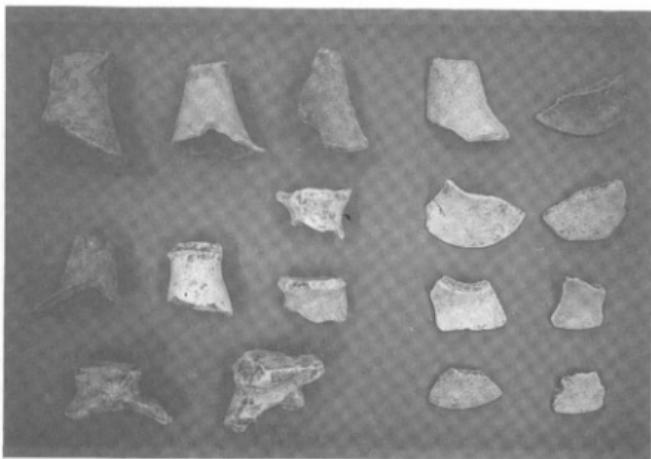
同 上



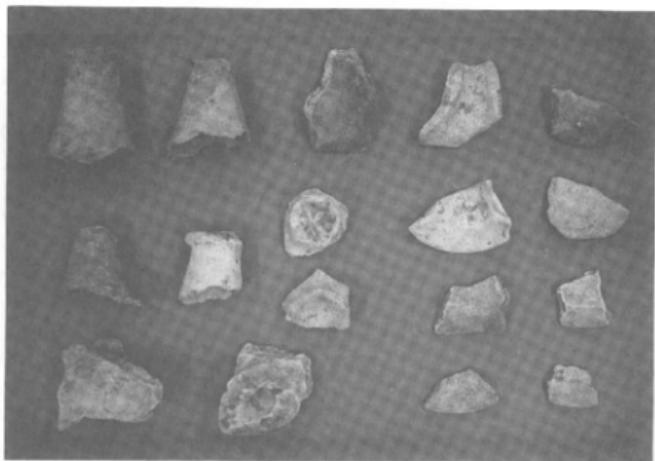
西南旧水田出土遺物 3



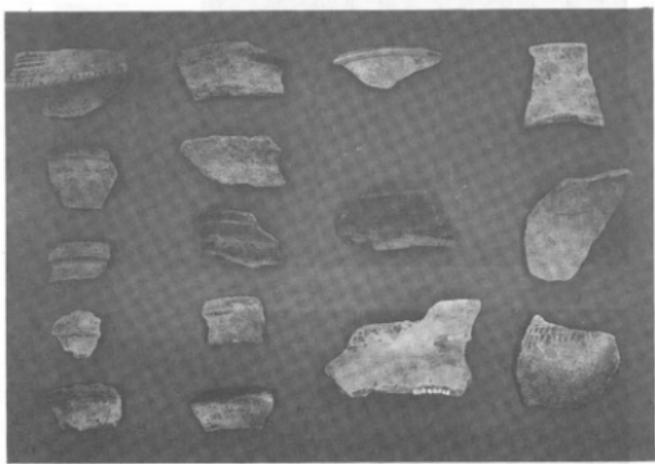
同 上



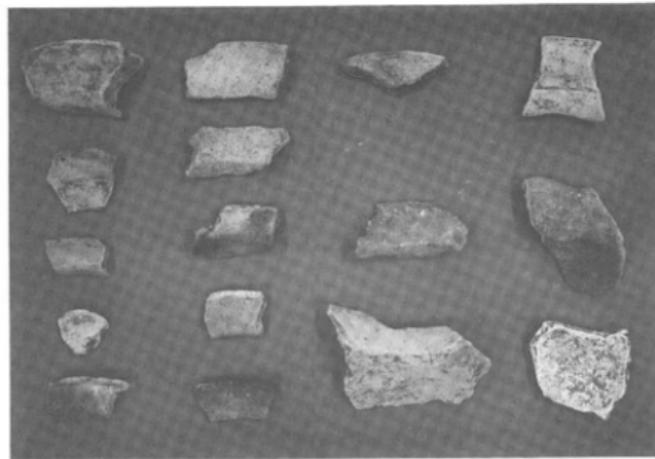
西南旧水田出土遗物 4



同 上

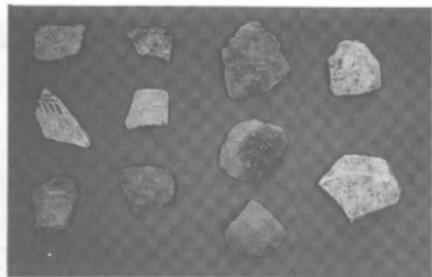


西南旧水田出土遺物 5

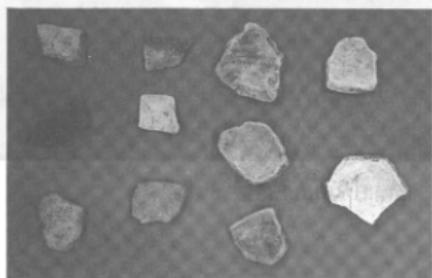


同 上

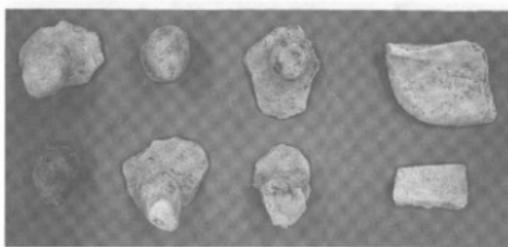
西南旧水田
出土遗物 6



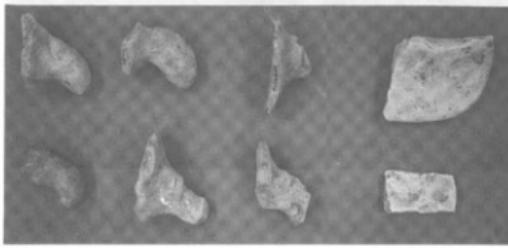
同上

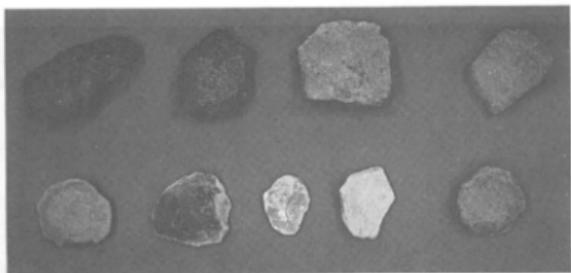


西南旧水田
出土遗物 7

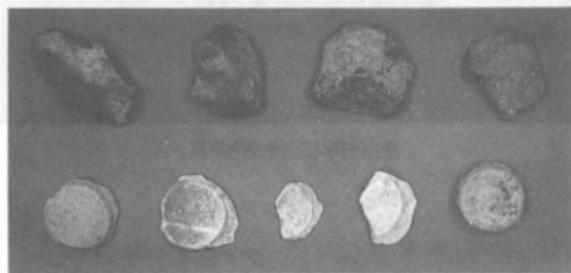


同上

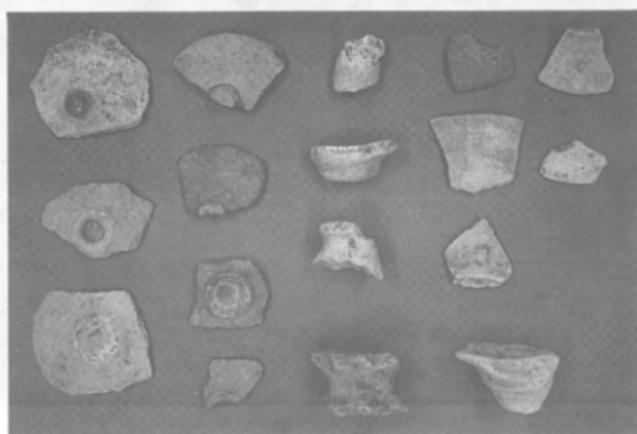




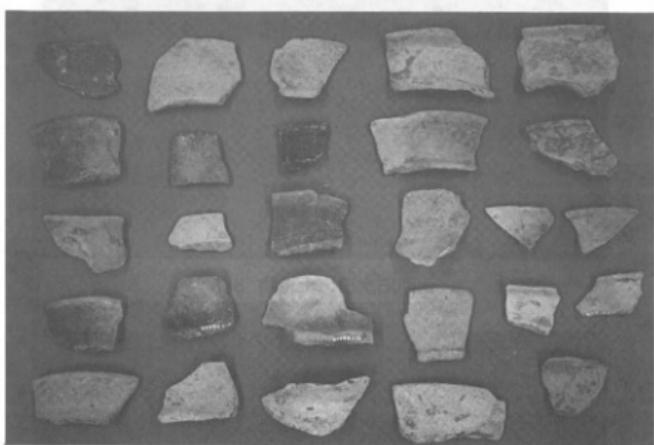
西南旧水田出土遺物 8



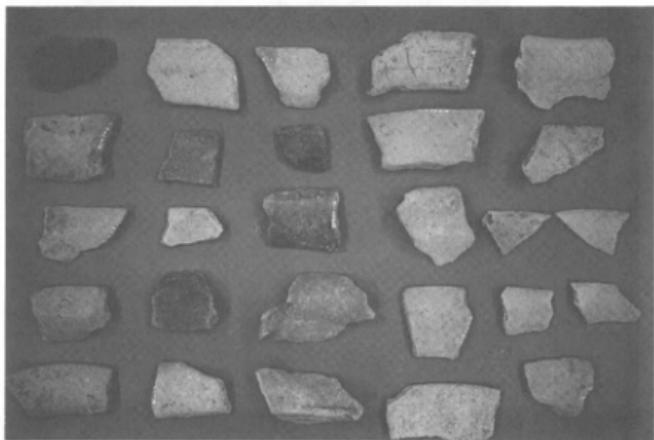
同 上



東南旧水田出土遺物 1



東南旧水田出土遺物 2



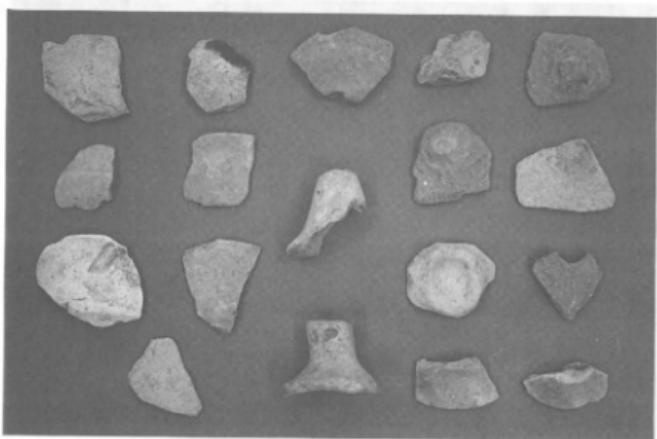
同 上



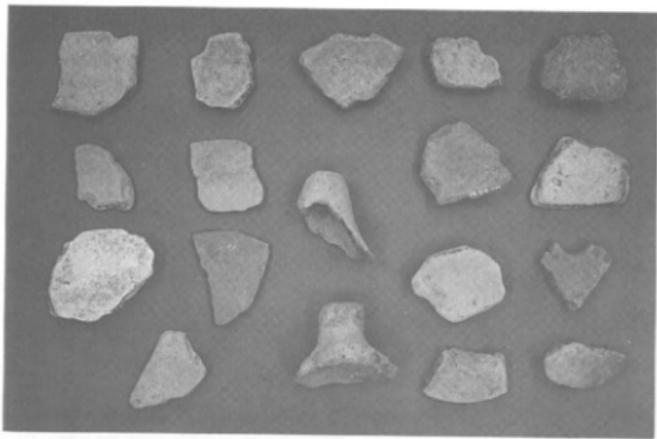
東南旧水田出土遺物 3



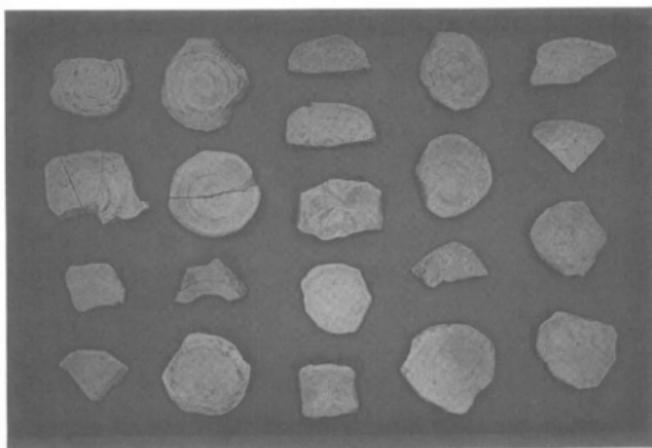
同 上



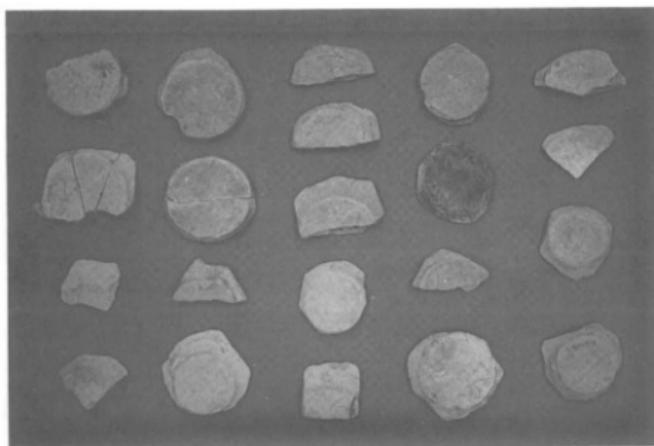
東北旧水田出土遺物 1



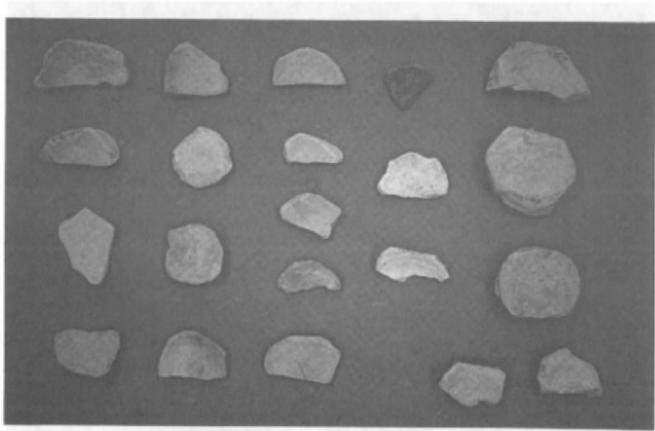
同 上



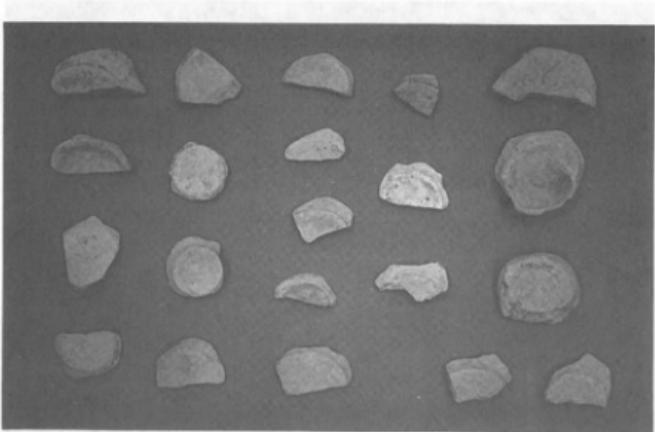
東北旧水田出土遺物 2



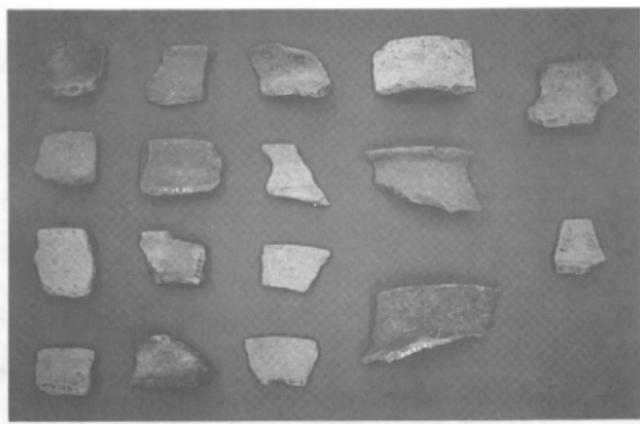
同 上



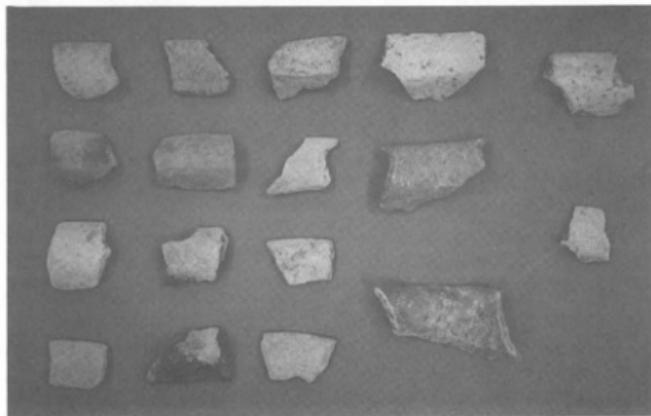
東北旧水田出土遺物 3



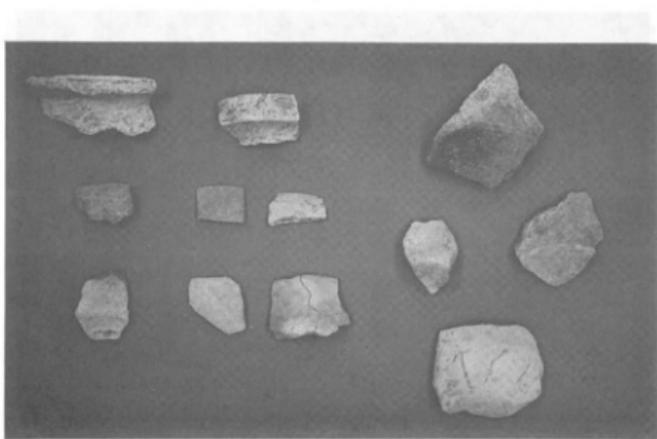
同 上



東北旧水田出土遺物 4



同 上



東北旧水田出土遺物 5



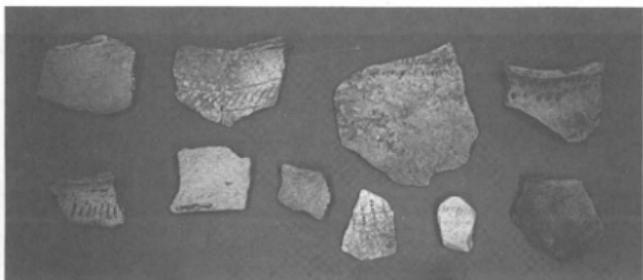
同上



西北砂質黑色土層出土遺物 1



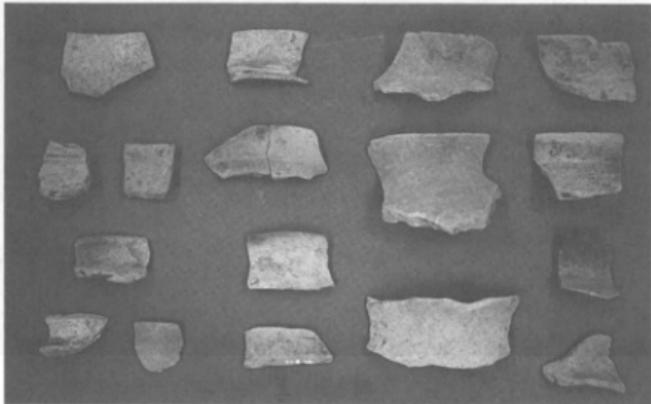
同 上



西北砂質黑色土層出土遺物 2

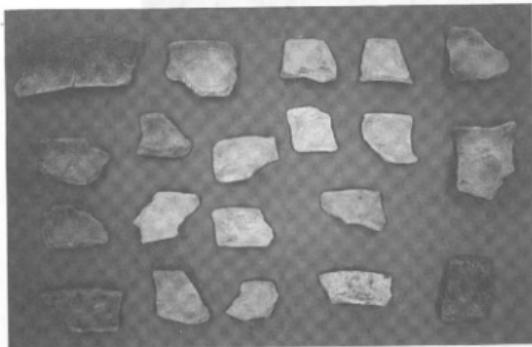


同上左上擴大

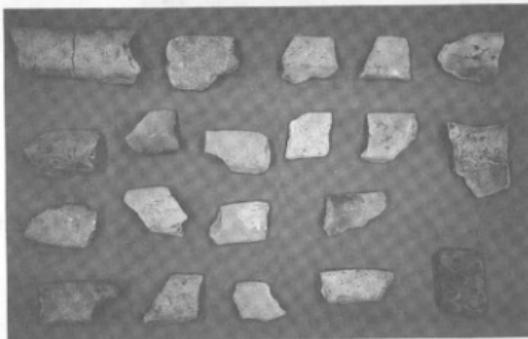


西北砂質黑色土層出土遺物 3

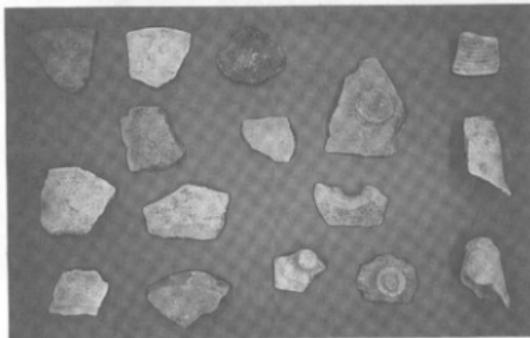
西北
砂質黑色土層
出土遺物 4



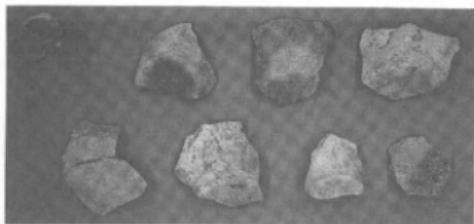
同 上



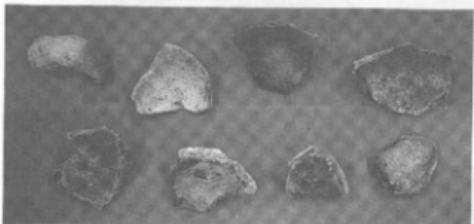
西北
砂質黑色土層
出土遺物 5



西北
砂質黑色土層
出土遺物 6



同 上



東北
砂質黑色土層
出土遺物 1



同 上

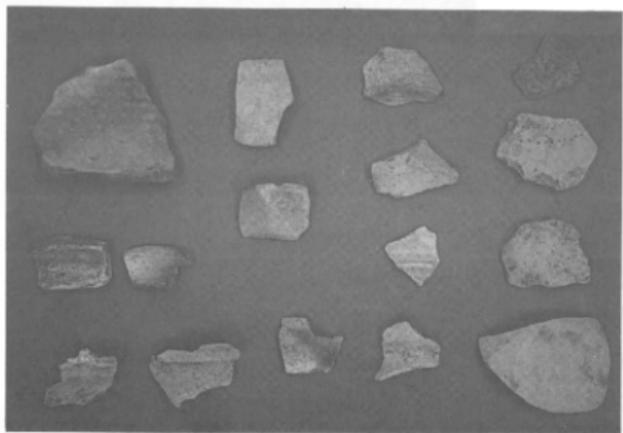




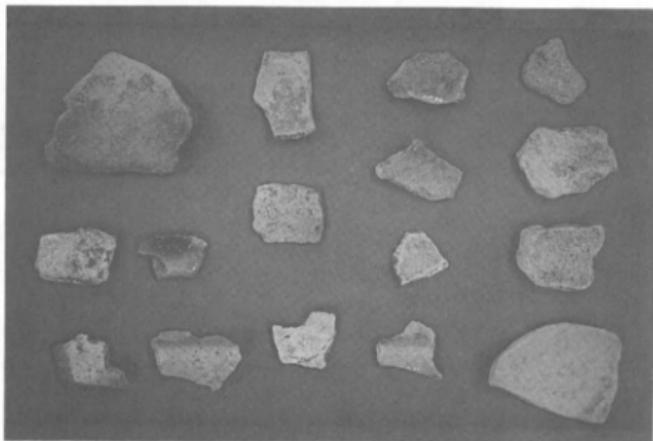
東北砂質黑色土層出土遺物 2



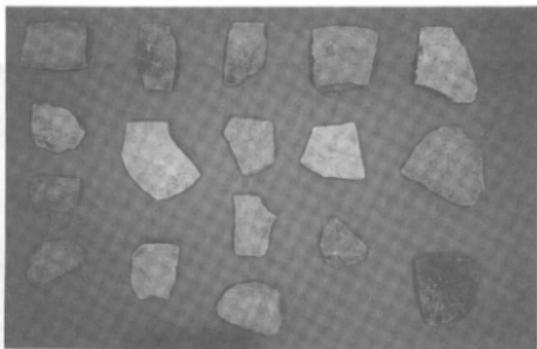
同 上



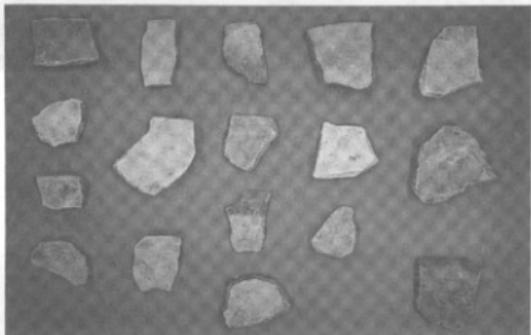
東南砂質黑色土層出土遺物 1



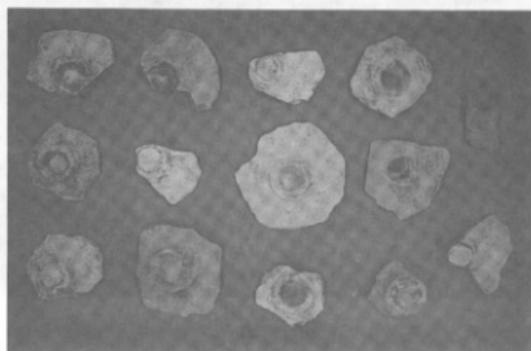
同 上



東南砂質黑色土層出土遺物 2



同 上

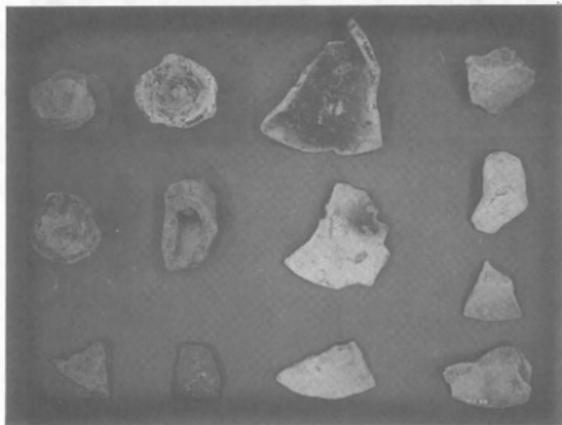


東南砂質黑色土層出土遺物 3

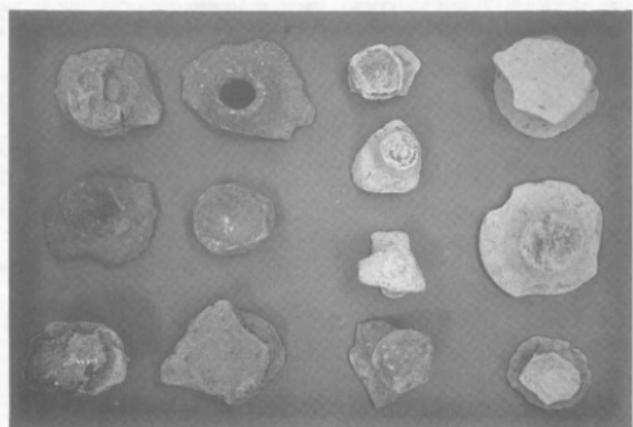


東南砂質黒色土層出土遺物 4

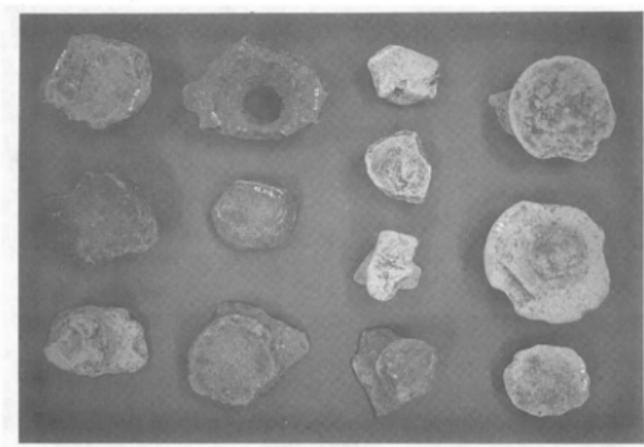
(中央右から 2 番目高坏筒下端
に 2 穴…周 5 穴?)



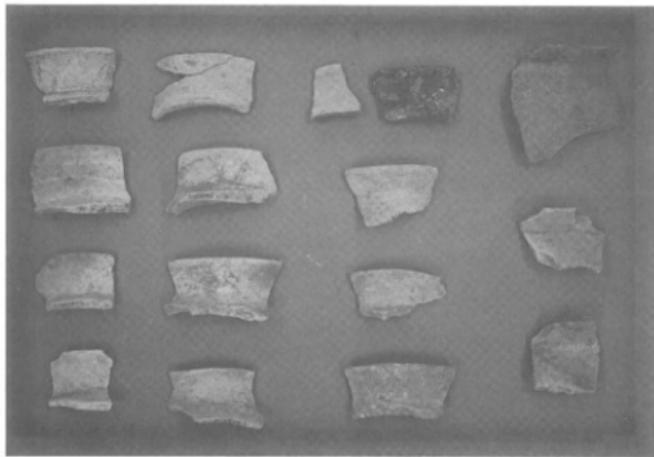
同 上



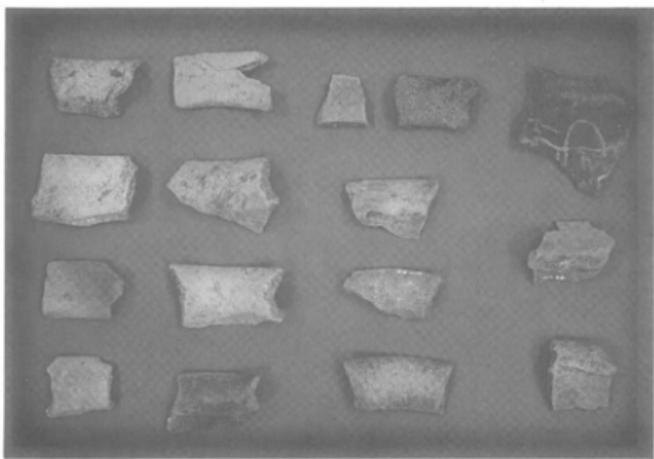
東南砂質黑色土層出土遺物 5



同 上



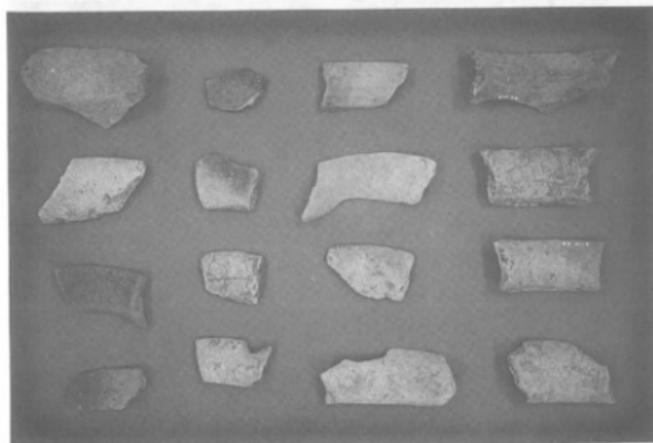
東南砂質黑色土層出土遺物 6



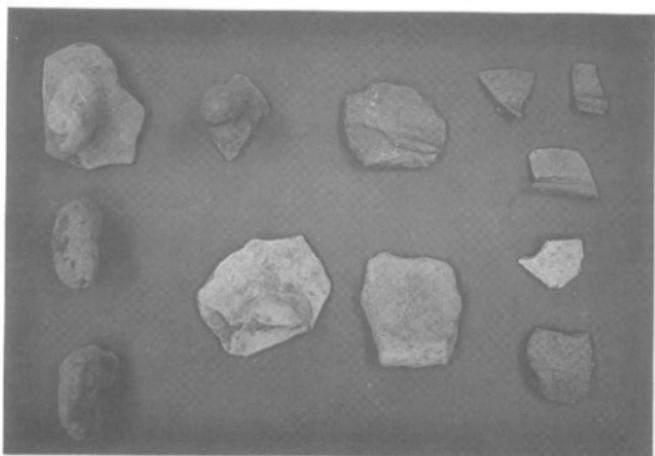
同上



東南砂質黑色土層出土遺物 7



同 上



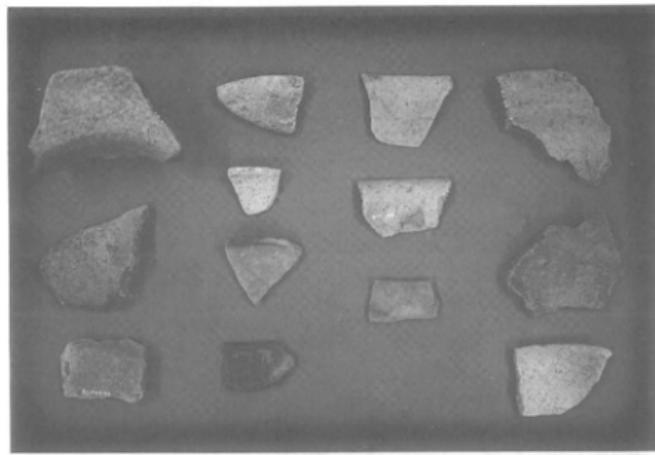
東南砂質黑色土層出土遺物 8



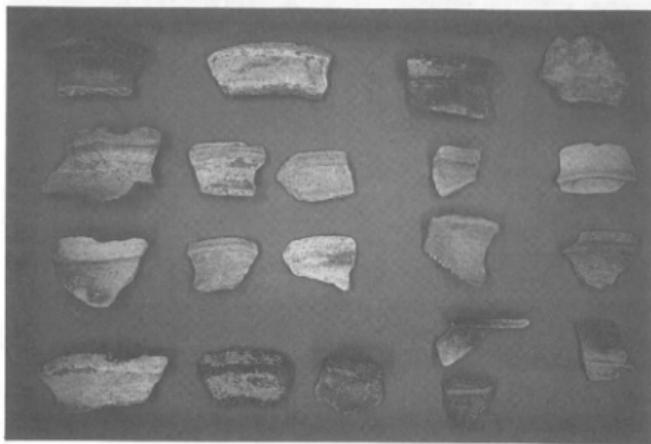
同 上



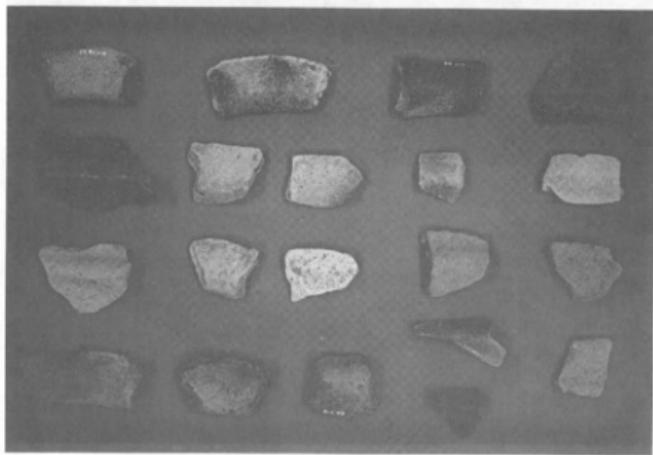
西南砂質黑色土層出土遺物 1



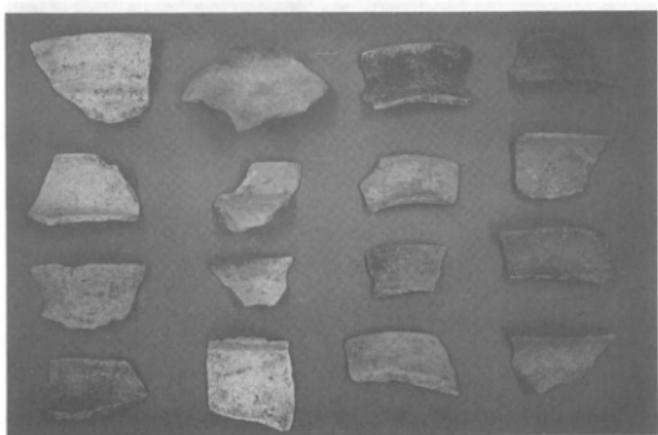
同上



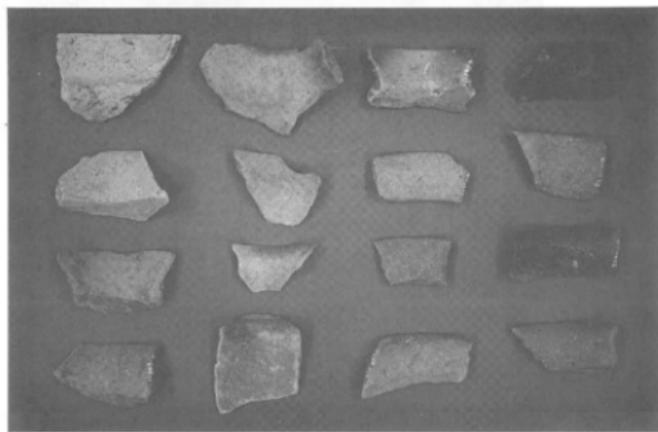
西南砂質黑色土層出土遺物 2



同 上



西南砂質黑色土層出土遺物 3



同 上

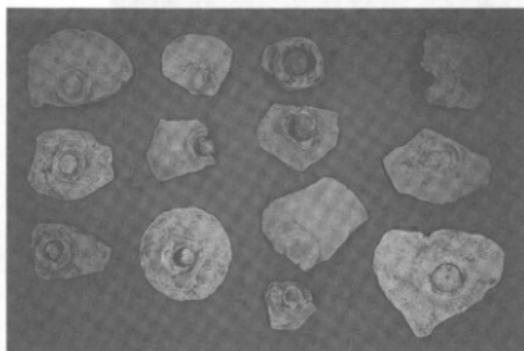


西南砂質黑色土層出土遺物 4



同 上 5

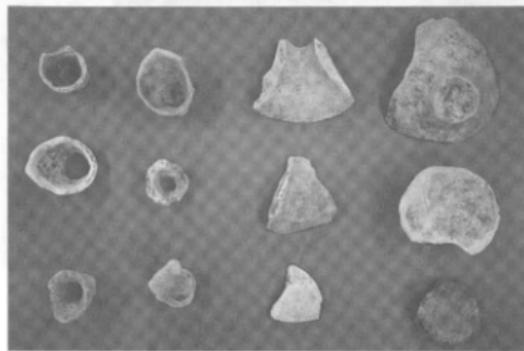
西南
砂質黑色土層
出土遺物 6



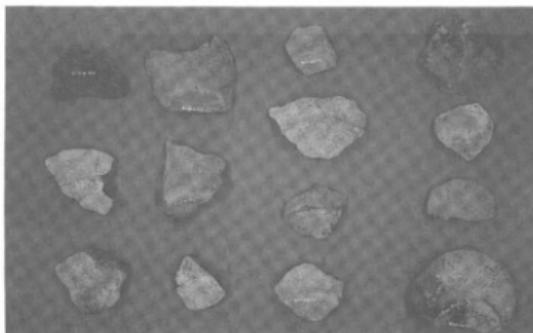
西南
砂質黑色土層
出土遺物 7



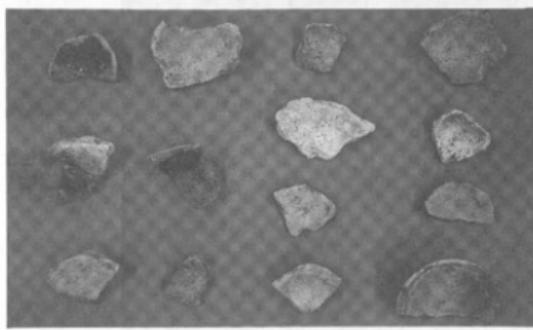
同上



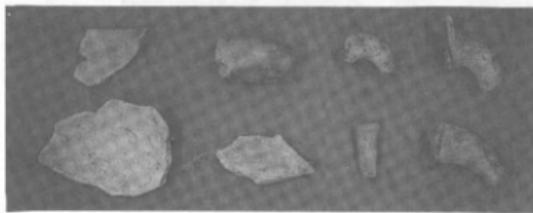
西南
砂質黑色土層
出土遺物 8



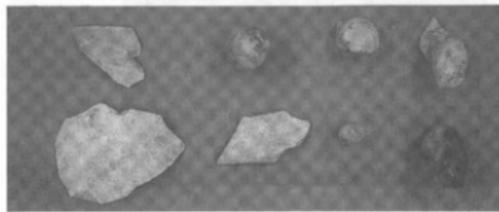
同上



西南
砂質黑色土層
出土遺物 9

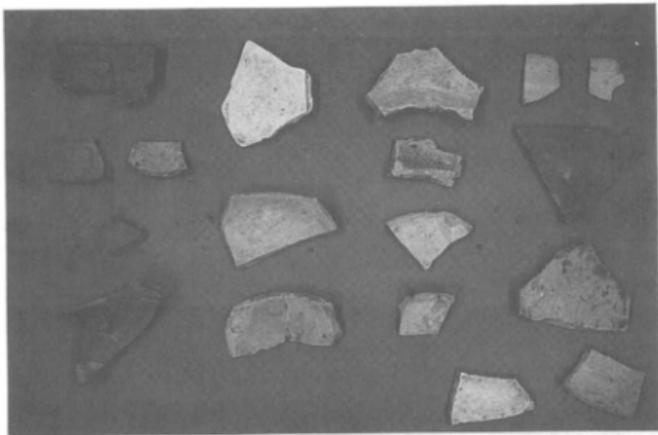


同上

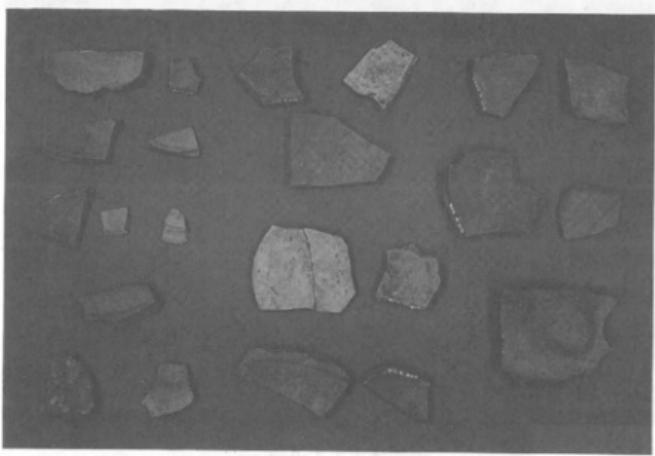




西南床土出土遺物

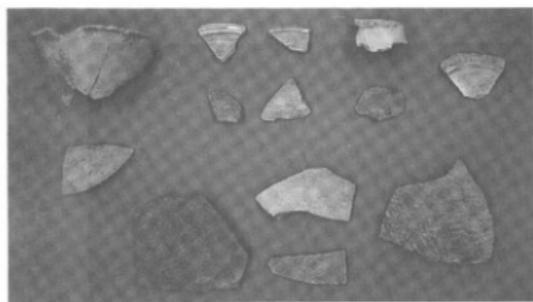


同上

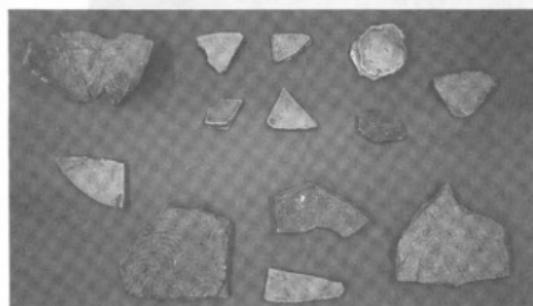


西北床土出土遗物

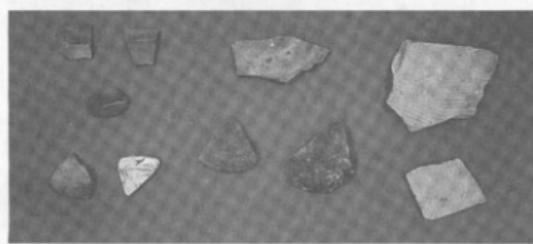




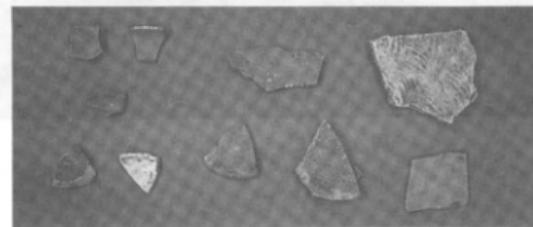
東南床土
出土遺物
(右上高坏)
5穴?



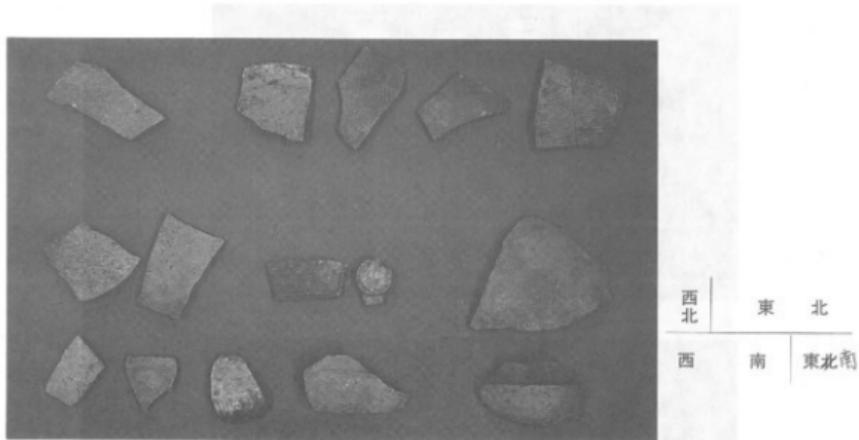
同 上



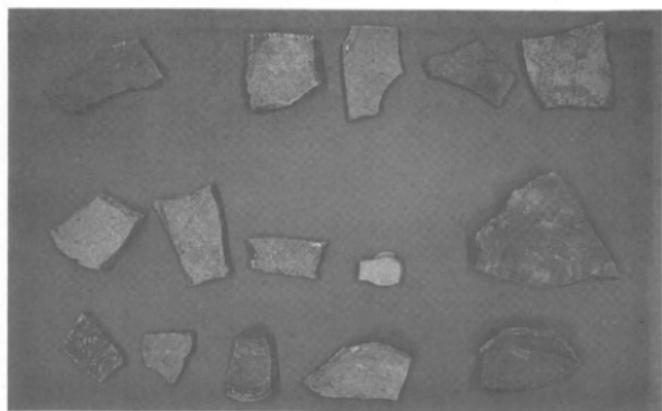
東北床土
出土遺物



同 上



砂質黑色土層出土



同 上

1992年12月29日発行

古八幡付近遺跡

発行 有限会社 島根急送

江津市教育委員会

印刷 玉江印刷

鳥取県江津市江津町1110
